

令和 2 年度

第 22 回 わたしの主張岩手県大会 発表文集



わたしの主張岩手県大会実行委員会

目 次

1	はじめに	1
2	大会日程	2
3	大会風景	3
4	わたしの主張発表作品	5

区 分	発 表 題	学 校 名	学年	氏 名
最優秀賞	生き続ける	盛岡市立下橋中学校	3 年	鈴 木 凜
優 秀 賞	See you !	盛岡市立河南中学校	3 年	松 本 響 佳
	当たり前じゃない日常、当たり前の違い	北上市立北上北中学校	3 年	小田島 は な
優 良 賞	音のない舞	花巻市立矢沢中学校	3 年	山 口 莉 乃
	つながろうとする心	釜石市立唐丹中学校	3 年	中居林 優 心
	言葉の力	宮古市立河南中学校	3 年	小 本 真 耶
入 賞	「自分」を変える小さな一步を	盛岡市立北陵中学校	3 年	内 舘 凜
	ボランティアってめんどくさい!?	岩手町立沼宮内中学校	3 年	三 浦 巴 那
	同じ人間なのに	紫波町立紫波第一中学校	3 年	菅 原 彩 希
	「恐れ」と向き合って	金ヶ崎町立金ヶ崎中学校	3 年	鈴 木 香 桜
	心のディスタンスは要らない	岩手県立一関第一高等学校附属中学校	3 年	佐 藤 優 奈
	命輝く未来へ	一関市立藤沢中学校	3 年	佐 藤 早和子
	あなたの勇気から	大船渡市立綾里中学校	3 年	花 輪 日茉里
	新時代を強く生きていく	遠野市立遠野東中学校	3 年	菊 池 恭 護
	～これから始まる私の道～	岩泉町立小川中学校	3 年	遠 藤 未 羽
	地球に生きる	洋野町立種市中学校	3 年	田 毛 咲 羽
	老いと向き合う			
	故郷	二戸市立浄法寺中学校	3 年	安ヶ平 海 永

※ 各賞受賞作品は地区順に掲載しています。

5	審査委員長講評	23
6	各地区大会の開催結果	24
7	審査要領	28
8	第 22 回わたしの主張岩手県大会実施要綱	29
9	わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者	31
10	参考 「少年の主張全国大会～わたしの主張 2020～」入賞作品	32

は じ め に

第 22 回わたしの主張岩手県大会は、令和 2 年 9 月 16 日（水）に滝沢市のビッグルーフ滝沢を会場に開催されました。この大会には、今年は約 3,700 名の中学生が参加し、県大会には、地区大会で選ばれた代表 17 名が出場しました。なお、今大会は、新型コロナウイルス感染拡大の観点から、無聴衆で開催いたしました。

この大会は、次代を担う中学生に、未来に向けての夢、社会に対しての意見や希望、日常生活の中で感じたことや考えたことを発表する場を提供することにより、自らの主張を正しく伝え理解してもらう力を身に付けるとともに、地域社会との関わりについて考え、行動する契機とするほか、多くの県民に中学生の考えや行動への理解を深めていただくことを通じて、子どもたちの健全育成の充実を期すことを目的として実施しているものです。

主張の内容は、日常生活、学校生活、クラブ活動など、自分の身の回りで起こる様々な体験を通して、気づいたり学んだりした「生き方」、「考え方」などを訴えるものとなっており、瑞々しい感性と澁刺とした態度で、素直で中学生らしい思いが込められた主張は、聴衆の心を打ち、感動を与える素晴らしいものばかりでした。特に本年は、新型コロナウイルス感染症をめぐる差別の問題、SNS で誹謗中傷を受けた経験、手話ボランティアの活動、また、命の尊さや重さ、家族や友人とのふれあいや支え合う心や思いやる気持ちを描いた発表が目立ちました。

発表の内容となっている家族との関わり、人との関わり、地域との関わりの中で思いやりの心や支え合う気持ちをもって生きていく大切さなどは、今の時代に求められる家族愛、郷土愛そして地域の防犯意識の啓発にもつながるものと考えられるところです。

この発表文集から、その主張に込められたメッセージをしっかりと受け止めていただき、次代を担っていく中学生が何を感じ、考えているのかを知る契機としていただければ幸いです。

なお、本大会の最優秀賞受賞者の鈴木凜さんは、令和 2 年 11 月 8 日（日）に国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会（WEB 開催）」において、努力賞を受賞しました。

おわりに、本大会を開催するにあたり、滝沢市、滝沢市教育委員会をはじめ、関係者のご協力とお力添えをいただきましたことに感謝申し上げ、巻頭のごあいさつといたします。

令和 2 年 12 月

わたしの主張岩手県大会実行委員会

第 22 回わたしの主張岩手県大会日程

日時：令和2年9月16日（水）12：45～16：20

会場：ビッググループ滝沢

（滝沢市下鵜飼 1 番地 15）

- | | | | |
|---|-----------|--|---------|
| 1 | 開会のことば | わたしの主張岩手県大会実行委員会 | 宮 卓 司 |
| 2 | 主催者あいさつ | わたしの主張岩手県大会実行委員会
(公社)岩手県青少年育成県民会議会長 | 平 井 ふみ子 |
| 3 | 歓迎のことば | 滝沢市教育委員会教育長 | 熊 谷 雅 英 |
| 4 | 大会出場者紹介 | | |
| 5 | 審査委員紹介 | | |
| | 審査委員長 | (株)岩手日報社論説委員会委員長 | 郷 右 近 勤 |
| | 審査委員 | N H K 盛岡放送局放送部シニアアナウンサー | 河 島 康 一 |
| | | (一社)岩手県芸術文化協会会長 | 柴 田 和 子 |
| | | ガールスカウト岩手県連盟連盟長 | 菊 地 真 弓 |
| | | 岩手県中学校文化連盟郷土芸能専門部長 | 田 口 秀 樹 |
| | | (公社)岩手県青少年育成県民会議副会長 | 菅 野 洋 樹 |
| | | (公社)岩手県防犯協会連合会専務理事 | 井 上 正 |
| 6 | 主 張 発 表 | | |
| 7 | 成績発表並びに講評 | 審査委員長 | 郷 右 近 勤 |
| 8 | 表彰（賞状） | わたしの主張岩手県大会実行委員会
(公社)岩手県防犯協会連合会会長 | 細 江 達 郎 |
| | （記念品授与） | (株)岩手日報社論説委員会委員長 | 郷 右 近 勤 |
| 9 | 閉会のことば | わたしの主張岩手県大会実行委員会 | 宮 卓 司 |

大会風景



主催者あいさつ（平井ふみ子県民会議会長）



歓迎のことば（滝沢市教育委員会 熊谷雅英教育長）

発表風景





成績発表・講評（郷右近勤審査委員長）



表 彰 式



盛岡市立下橋中学校3年 鈴木凜さん



盛岡市立河南中学校3年 松本響佳さん



北上市立北上北中学校3年 小田島はなさん



花巻市立矢沢中学校3年 山口莉乃さん



釜石市立唐丹中学校3年 中居林優心さん



宮古市立河南中学校3年 小本真耶さん

第 22 回わたしの主張岩手県大会出場者 発表作品

(原文のまま掲載)

※ 縦書を横書としたため、漢数字の一部を算用数字に置き換えました。



最優秀賞

生き続ける

盛岡市立下橋中学校 3年

鈴木 凜（すずき りん）

恐る恐る抱っこすると、愛くるしい笑顔で私を見つめる。笑っても泣いてもかわいくて愛おしい。結美ちゃんは私のいとこの子供ですが、兄弟のいない私にとって妹のような特別な子です。結美ちゃんの両親はもちろん、みんなが結美ちゃんを可愛がりました。だからこそ、その知らせはあまりに突然でした。

「結美ちゃんが意識不明のまま病院に搬送されたって。」

帰宅した母が言った言葉に、何のことなのか理解できず聞き返したかどうか覚えていません。結美ちゃんは、まだほんの1か月前に生まれたばかりなのです。

大急ぎで病院に駆け付けると、たくさんの管が結美ちゃんにつながれていました。まるで管がその場所から結美ちゃんが動くことが出来ないように捕まえているようです。それでも、結美ちゃんは小さな体ながら呼吸をしています。しかし、結美ちゃんが目を開けることはないということでした…。

結美ちゃんには2つの選択肢が残されました。心臓死をもって自然死とするか、脳死判定をするか。さらに、臓器提供という話も出てきました。結美ちゃんはまだ小さく、意識不明の状態にあるため、それを決めるのは家族でした。親族の話合いで、わたしのいとこ、つまり結美ちゃんの母親は、

「まだ生きようとしている結美の命を奪って臓器を取り出すことを承諾出来るはずがないでしょ。」と臓器提供に強く反対しました。脳死といっても心臓はまだ動いているのです。

誰も何も言えず、重い空気がしばらく漂いました。そして、重い沈黙を破ったのは結美ちゃんの

祖母でした。

「結美の命は生き続ける。たとえ体が全て灰になってもその人の中で生き続けるのよ。」

生き続ける。涙を堪えながら言い放ったこの言葉には力がありました。臓器提供をすれば、誰かの体の中で結美ちゃんは生き続ける。結美ちゃんが生きた証を残すことが出来る。そう感じたのは私だけではないようでした。

その後、結美ちゃんは脳が機能していないとして脳死と判定され、臓器提供が行われました。

あれから1年がたちました。1年たって、結美ちゃんのお母さんはこう言っていました。「本当にこれでよかったのかと何度も悩んだことがあったけれど、今は後悔していない。あのときの選択は正しかったと信じている。」と。

そのことを聞いて、私は母に尋ねました。私がある日突然脳死となったら、母はどうするのだろうか…。

「凜の意思が分かっているのなら、意思を尊重してあげたいと思う。でも、自分の子どもだから生きていてくれることが第一。本当にそうになったらとても悩むと思う。」

私は、この体験を通し、そして、子を持つ親の言葉を聞いて、自分の命は他の人にとってもかけがえのないものであることを実感しました。命は自分だけのものではない、命にはその人の歴史があり、未来への希望があり、そして、多くの人の思いも背景にあります。だから、死んでも命は誰かの中で生き続けていくのです。

あなたの命も、誰かの中で生きています。これからも、生き続けていくのです。だからこそ、多くのみなさんにも、今、生きていることを大切にしてほしいと強く願います。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を老若男女問わず、多くの人に届けたいです。私はこの主張を通して、自分の命は自分だけのものではなく、他の人にとってもかけがえのないものであり、強い影響を与えているということを実感しました。だからこそ、自分自身が心に留めるだけでなく、多くの人にも意識しながら生きてほしいと思いました。私の発表が、聞いてくださった方々にとって、自分の生き方をみつめるきっかけになれば、とても嬉しいです。



優秀賞

See you !

盛岡市立河南中学校 3年

松本 響 佳 (まつもと きょうか)

(♪君の笑顔がステキだから♪)
歌いたい！

当たり前が当たり前でなくなることで、普通の日常が、どんなに大切でかけがえのないものであるかということ。そして、本当に大切なものは、いつも身近にあるのだということー。

私は小学校1年生の頃から、ある合唱団に所属し、中3の今まで歌を歌ってきました。学校の枠を超えた仲間と共に曲を作り上げ、新しい自分と出会う活動は、時にくじけそうになることがあっても、何ものにもかえがたい素晴らしい時間でした。

しかし、「卒団」の節目の今年、コロナウイルスの影響でたくさんのステージが中止となってしまいました。今年はこの9年間の全てを出し切ろうと思っていたのにー
どん底の気持ちでした。

そんなある日、新聞で不来方高校音楽部の記事を見つけました。この学校には、合唱団で共に練習を積み重ねてきた先輩方がたくさんいます。卒団しても時々練習に来て一緒に歌ってくれていました。

部長さんは取材にこう答えていました。

「コンクールも中止になり、普段の練習も満足にできていないんです。でも、これまでつくり上げてきた伝統を後輩に引き継ぐために歌い続けたいんです。」

毎年全国一位を目指す有名な合唱部です。やり場のない怒りや悔しい思いがたくさんあったはずです。

記事を読みながら、私の頭の中には部長さんのあの笑顔と合唱団の練習風景が浮かんでいました。

(♪君の笑顔がステキだから、またどこかで会おう See you ♪)

これは小1で初めて歌った合唱曲「See you」です。たくさんの先輩方が心を込めて歌いついてきたこのフレーズが、私に気づかせてくれたことーそれは、歌というものが自分にとって本当にかかけがえのないものになっていたということ、そして何気ない「当たり前」の毎日こそが、今の私をつくってきたのだということです。

休校中、私は不安といらだちでいっぱいでした。楽しみにしていたいろいろな学校行事も全て中止。「なんで!?!」「なんで!?!」

やり場のない怒りの毎日が続きました。

今思えばきっとそれは、「当たり前の毎日」を、その『「当たり前」を積み重ねてきた自分自身』を失ってしまういらだちだったのだと思います。

朝起きて、学校へ行き、友達とおしゃべりし、そして歌うーそんななんでもない日々の一つ一つが今につながっていたんだーそう感じるのです。普通に暮らしていた日常が消えるーそれは言い換えれば、それまで積み重ねてきた自分の存在そのものが否定されてしまうことだと言えるのかもしれない。

新聞やニュースは日々コロナの動きを報じネット上では感染してしまった人やルールを守り切れない人達を、まるで「犯罪者」のように扱い中傷する負の動きが渦まいています。それはきっと私と同じように「大切な日常を壊される不安」からなのではないでしょうか。

今、私たちがすべきこと。それは人を攻撃して不安を打ち消し、自分を守るのではなく「今何ができるか」「どうすれば前に進めるのか」を考え実行していくことなのだと思います。私達一人一人が同じ気持ちになれたとき、おだやかに暮らせる新しい形の日常が戻ってくるのだと私は信じています。

もちろん今の私にこの世界規模の問題を解決できるような力はありません。でも、目の前にある一つ一つの問題に誠実に向き合い自分なりに考えることはできるつもりです。「当たり前」の「普通」の毎日がどれほど大切なのかを見つめ直し、人々が力を合わせていけばどんな困難にも立ち向かっていけると信じています。

また心の底からみんなと歌える日が来ると私は信じています。

笑顔で前を向いて、See you !

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を、私と同じように合唱が大好きな人達、そして不安を抱えている多くの人達に届けたいです。今回、この大会に参加させていただくにあたって、私自身がコロナウイルスの中で合唱を中心に考えたこと、感じたことを書きました。私のようにコロナウイルスのためにさまざまな事ができなくなり今も不安を感じている人も多いと思います。でも、互いに力を合わせて頑張ろうと思ってもらえるように想いを込めて発表します。



優秀賞

当たり前じゃない日常、当たり前の違い

北上市立北上北中学校 3年

小田島 はな（おだしま はな）

みなさん、こんにちは！

こうやって元気に挨拶できるって素晴らしいことだと思いませんか？突然の休校が始まったとき、友達と元気に挨拶を交わすことが当たり前ではないと誰もがハッとしたのではないのでしょうか。でも、いつも忘れているだけで、平和な毎日が続く保証など、どこにもないのです。10年前の東日本大震災、そして今はコロナウィルスによって様々な制限がある生活を送っています。多くの恵をもたらす自然は、私たちに多くの試練を与えることもあるのです。当たり前のことなど一つもなく、嬉しいと思えることや大切な人々との生活は、その一つひとつが本当に貴重でありがたいものなのです。だからこそ私は思うのです。せめて人間同士による差別や偏見、争いはやめるべきなのだと。

私の母はインドネシア人で、父は日本人です。私はインドネシアのジャカルタで生まれてすぐに日本に来て、小学5年生まで日本で暮らしていました。そして小学5年生の時、父の仕事の都合で東ティモールという国に2年間住むことになりました。東ティモールはインドネシアから独立した新しい国で、人口も面積も岩手県と同じくらいの小さな国です。私は現地のインターナショナルスクールへ通い、そこにはオーストラリアやイギリス、アメリカ、アフリカ、インドネシア、中国、韓国、インドなどいろいろな国籍の人が通っていました。みんな仲がよく、一見人種差別などというものはないように感じました。しかし、ある日の出来事をきっかけに私はこの問題について考えました。

その日、些細なことをきっかけに二人の友達がちょっとした口喧嘩を始めてしまったのです。一人はエチオピアから来た女の子で、もう一人は現地の子でした。そして現地の子が、エチオピアの子にはわからないよう、私にインドネシア語で言いました。「これだからアフリカの人は。」と。

でも小さな声でしたが、私にも、エチオピアの子にもしっかり聞こえていました。言葉が分からなくてもなんとなく意味がわかったのだと思います。彼女は泣き出してしまいました。

その発言をしてしまった子も少し頭に血が上っていたのかもしれませんが、インターナショナルスクールという、そもそも多国籍の子どもたちが通う学校でさえ、そのような差別的な考えをしている人がいることを知って、とても悲しく、残念な気持ちになりました。そのエチオピアの女の子は、おそらくこのことを一生忘れることはないと思います。

世界では今、人種差別による悲しい事件がたくさん起こっています。ニュースで報道されるような事件だけでなく、このような小さな出来事でさえ、その人の心に一生消えることのない大きな傷を負わせてしまうのです。人種差別を世界から完全になくすことは難しいのかもしれませんが、一人ひとりが考え方を少し変えるだけで減らすことはできると思います。世界には約77億以上の方が生きています。肌の色や目の色、それぞれの文化は皆違います。それは当たり前なのです。それは一人ひとりの個性であり、この世界の良さでもあると私は思っています。みんながみんな同じである必要はありません。互いの文化を尊重し合い、たとえ自分の知っている見た目や文化とは異なっている、それを広い心で受け入れていくことができれば、少しでも差別のない社会に近づくことができるのではないのでしょうか。そして、この少子化社会のなかで、そのような考え方ができる人間を増やしていけるよう努力することも、未来を担っていく私たち子どもの役目なのだと思います。

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

自分自身が通っていたインターナショナルスクールで起こった友達同士の口喧嘩のなかであった差別的発言を聞いた経験をきっかけに、それを言われた人が暗い気持ちを持ったまま生きていくことを知り、この経験を通して少しでも多くの人に異文化を受け入れることの大切さを知ってほしいと思ったからです。



優良賞

音のない舞

花巻市立矢沢中学校 3年

山口 莉 乃（やまぐち りの）

こんにちは。私の名前は山口莉乃です。矢沢中学校の3年生です。

みなさんは、手話は特別な会話だと思っていませんか。我が家では、これが日常会話です。なぜなら、兄は耳が聞こえないからです。

兄は感音性難聴という難聴の障害を持って生まれてきました。耳が聞こえないというのも、人によって度合いが違いますが、兄の場合、生まれつきほとんど聞こえなかったそうです。そのため、言葉の発音がうまくできません。私は気がついたら、兄とは手話で会話をするようになっていました。

兄は色々なことに興味を持ち、たくさんの趣味があります。昆虫採集や石の収集、プラモデル作りなど、好きなことに一生懸命です。そして音楽にも興味を持っています。耳が聞こえないのに音楽が好きというのも矛盾しているようですが、兄はきっと肌で音楽を楽しんでいるのだと思います。私は音楽が好きで、小学生の頃から箏を弾いたり、吹奏楽部に所属していたりとステージに立つ機会がたくさんありました。その度、兄は頻繁に足を運んでくれました。「なんで聞こえないのに来るんだろう」とその時はすごく疑問でした。でも、私にとって大事な舞台の、その会場の雰囲気を見に来てくれていたんだと分かりました。

そして、兄が最もすごいと思ったのは、神楽に参加していることです。太鼓や笛、お囃子の音が神楽のイメージです。その拍子に合わせて舞を踊るのが神楽です。生まれてから音を聞いたことのない兄が、神楽を踊るのは無理だと思うでしょう。しかし、兄は何のためらいもなく、神楽をやると言い出しました。そして、両親も反対することもなく、神楽の保存会で練習を始めることになったのです。

練習が始まり、兄は周りの人に合わせて、楽し

そうに踊りました。でも、踊り始めるタイミング、頭を合わせて鳴らすタイミングなど、音が聞こえていても神楽は大変難しい踊りです。私は踊りながら、どうしても兄が気になり、自分の舞に集中できませんでした。しかし、兄は反対に、他の人の動きを見ながら、スタートしたり、途中で止めたりしていたことに気づきました。

私に負担をかけないように、ただ一緒に踊ろうとだけ言って始めました。でも、それは私の耳を通して、兄は音を感じて踊っていたのです。そのことが分かった時、私はもっとしっかり踊ろう、集中してリズムを取ろうと思うようになりました。兄のおかげで神楽も上達していききました。今では二人で、もっと上手になろう、もっと良い舞を舞おうという意識が高まっています。

障害がある人を見ると、その人のために何かしてあげよう、助けてあげようという気持ちが福祉だと思ってしまいます。でも、それは相手に対してのただの同情のような気がします。

兄がなぜ、神楽を始めたのかというと、先祖代々神楽を伝承してきた家に生まれた兄は、障害など関係なく、神楽を踊るのが当たり前だと思ったのでしょう。できないと決めつけていたのは私たち周囲の人の勝手な差別意識かもしれません。

もし兄の耳が聞こえていたら、音楽の話をたくさんできただろうし、電話で会話をすることもできます。でも、私は今のこの生活が大好きです。手話のおかげで、そして兄のおかげで今の自分がいます。

私はこれからも兄からたくさんのことを学び続けたいと思います。

ありがとうございました。

○ この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は今までの生活で、兄から学んだことがたくさんありました。障害に対する意識や考え方など、兄や周りの人がいなければ考えもしなかったと思います。この発表を通して、私は、聞こえない人と手話を通じて言葉をつないでいけるような職業に就けたらと思っています。ですが、職業に限らず、今からでもできることはたくさんあるので、目の前のやれることを全力で取り組んでいきたいと思っています。



優良賞

つながろうとする心

釜石市立唐丹中学校 3年

中居林 優心（なかいばやし こころ）

【手話と言葉で】

「皆さん、こんにちは。私の名前は、優心です。私は、友達と楽しく過ごすことが大好きです。」

友達と冗談を言って笑い合い、大きな声で励ましながら部活動に励み、一日の出来事を家族と話す。これが、わたしにとってかけがえのない日常です。

皆さんは考えたことがありますか。目や耳が不自由な人たちは、私たちが過ごすこんな日常をどうやって過ごしているのでしょうか。「耳の不自由な人とも、手話でつながり、楽しみたい。」充実した日々があったからこそ、ふと浮かんだこと。これが、手話を学び始めたきっかけです。

まず私は、図書室の本で手話の挨拶を学びました。さらに詳しい手話は、手話辞典を買い、インターネットで学びました。手の動きがわからなかったり、知りたい単語がすぐ見つからなかったり、苦戦しました。数も多く、覚えたつもりでも次の日には忘れてしまう……。使われる手話は、国や地方によっても異なります。

それでも、少しずつわかる単語が増えてきました。テレビの、手話通訳の人が使っている単語がわかるたび、うれしさが増していきました。初めて見る表現は辞典で調べ、自分の中に吸収していきました。

また、私たちは学校の防災学習で災害時の対応について考えました。避難所に指定されている唐丹中体育館には、どんな人が避難してくるかわかりません。その取り組みから、どんな立場の人でも安心できる環境でなければいけないと感じました。そこで私たちは、地域の人を想定した避難に加え、英語、ドイツ語、ベトナム語、中国語の多言語での対応も考えました。さらに、障がいを抱えた人も、安心できる環境が必要になってきます。

【手話のみ】

「助けてください。倒れている人がいます。私

は救急車を呼びません。」

もし、このように手話で話しかけられたら、皆さんはどうしますか。必死で助けを求める手話が伝わらない。そんなもどかしさを日々感じている人がたくさんいます。

そう考えたとき、人と話すという当たり前のことに、“どんな人とも”を付け加えると、大きな壁があることに気付きました。英語を習っていても、英会話は難しいと感じている人も多いことでしょう。ましてや手話で冗談を言い合い、楽しさを分かち合うなんて……。

本当にそうでしょうか。手話ができないと、多くの言語を身に付けないと、耳の不自由な人や外国の人とつながることはできないのでしょうか。それは違うはずです。

手話は指先だけでなく、伝えようとする表情、相手をわかろうとする心でようやく伝わると私は思っています。つながろうとする心があれば、どんな方法でも会話は成り立つはずです。

つながろうとする心、相手をわかろうとする心があれば、世の中はもっと住みよくなるのではないのでしょうか。人とのつながりが希薄になっている今の社会にこそ必要なことです。

どんな人とも心の中から笑い合うことができれば、ネットの誹謗中傷、いじめ、さまざまな差別がなくなるのは夢ではありません。きっと、変えられる世の中がもっともっと広がっている。

「伝えたいことが相手に伝わらない。」私は少しでもこのもどかしさを消せるように、これから“つながろうとする心”を大切に手話を学んでいきます。

【手話と言葉で】

「ありがとうございました。」

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、この主張を、目や耳に障がいをもっている人、さらに、障がいを他人事と思っている人に届けたい。クラスメイトに発表した時、友人が、「手話を学んでみたい」ではなく、「手話を学ぶべきだ」と言ってくれた。友人のように、手話に興味をもってどんな人ともつながろうとする心をもつ人がこの主張で少しでも増えると嬉しい。



優良賞

言葉の力

宮古市立河南中学校 3年

小 本 真 耶 (おもと まや)

「シネ」

「マジ殺していい？」

皆さんはこの言葉を聞いて、どう思いますか？
それはある日私のスマホに届いた言葉です。

私は中学2年生のころから友だちの影響でインスタグラムという SNS をやっています。ある時、インスタグラムと連携する、「質問箱」というアプリの存在を知りました。質問箱とは匿名で相手に質問を送り、SNS 上で回答するアプリ。私はそのアプリを、面白そうだから、友達もやっているから、という安易な考えでインストールすることにしました。質問箱を利用してみると、たくさんの人が私に質問を送ってくれました。それに答えることで私を理解してもらっているという喜びを感じることができました。

6月20日の土曜日。私は家に帰り、何気なくスマホの画面を見ました。すると、「暇だからアンチするわ」「マジ殺していい？」質問箱の中にはそんな言葉が次々と送られてきました。その日だけで40件。次の週には80件。私はパニックで手が震えてきました。頭の中は真っ白でした。もう自分にはどうすることもできない。匿名だから誰なのかもわからない。「誰がこんなものを送ったの？」「私、何か悪いことしたの？」不安に押し潰され、夜も眠れず、学校に行くのも辛くなりました。いつもなら気にならない全ての目線が気になり、送った人はこの中にいるのではないかとこの人かもしれない。あの人かもしれない。そうやってたくさんの人を疑ってしまいました。

SNS の中では相手の顔が見えません。直接話するときには相手の喋り方や表情から、相手の感情を

読み取ることができます。自分の言葉を相手がどう感じているのかをその場で感じることはできません。しかし SNS ではそれがありません。相手の顔が見えないことを利用して、良心の呵責もなく誹謗中傷の言葉を浴びせることができる。やっているのは自分だけじゃない、他の人もやっている。そんな無責任な集団心理も生まれる。

皆さんはこの事件を覚えていますか。「女性タレント、番組での言動をめぐる、SNS で匿名による誹謗中傷の集中砲火を浴び自殺」女性タレントは自ら有毒ガスを吸って自殺しました。でも私は違うと思います。誹謗中傷の言葉が彼女の心をえぐり取ったのです。言葉による殺人、私はそう思います。このニュースによって SNS による言葉の暴力について日本中で関心が高まったはずでした。しかし、人を変え、場所を変え、SNS 内での暴力は今でも続いているのです。

情報機器が次々と発展していく世の中を私たちは生きています。SNS を使う人が増えた分トラブルも増加していきました。「SNS なんかやめればいいのに」そう思う人もいるかもしれませんが、それが根本的な解決方法でしょうか。「相手の気持ちを考えることができるかどうか」糸口はここだと思います。

言葉は人を癒すことができます。しかし傷つけることもできます。言葉は両刃の剣なのです。人が生み出した最高のコミュニケーションツール「言葉」私たちはこの先どんなメディアが生まれたとしても、誰もが相手のことを思って言葉を使う社会を作っていかなければならないのです。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

全ての人に届けたいです。「SNS」での被害は年々増加しています。しかし SNS 上で使われる言葉も、私達が普段使っている言葉も本来は同じものなのだと思います。だから、全ての人がもう一度自分の使っている「言葉」を見つめ直し、受け取る側を幸せな気持ちにするよう、言葉を使っていく社会を作っていければいいと思います。



入賞

「自分」を変える小さな一歩を

盛岡市立北陵中学校 3年

内 舘 凜（うちだて りん）

「自分の気持ちを一番理解できる存在は、自分だけだ。」と聞いたことがあります。また、「自分にとっての最大の敵は自分だ。」という言葉も聞いたことがあります。どちらをとっても自分を変えられるか否かは、自分の踏み出す一歩にかかっています。そして、そんな「自分」を変えるために、私は小さな一歩を踏み出してきました。

小学生の頃の私は、消極的で何をするにも優柔不断、自分で決めたことに自信がなく、こわくて、母や父に

「ねえ、これでいいと思う？」

と賛同の声を求めてばかりでした。そんな、自分に自信がもてない、自分を責めてばかりの私だったからこそ、「いじめ」の標的になったのだと思います。

私は小学生の頃、いじめられた経験があります。悪口や仲間はずれは毎日のようにありました。

「辛いよ。なんで私がこんな目にあわなきゃいけないの？」

心が悲鳴を上げ、涙があふれても、馬鹿にされても、反抗したらもっとひどい状況になるのではないかと怖くて、何もできない自分がいました。しかし、私はそんな自分を変えてくれるものに出会ったのです。それは、柔道でした。友達にさそわれて「よし。やってみよう！」と踏み出した一歩で、何ひとつ自信を持てなかった私が少しずつ変わっていきました。辛い稽古を乗り越えたり、大会で成長を実感したりする中で、少しずつ自分でもできる、やれる、という前向きな実感が湧いてくるようになったのです。もちろん、全てが順調だった訳ではありません。怪我もしました。今でも医者から完治はしないと宣告を受けた右膝と付き合いながら柔道を続けています。しかし、全て

の経験が、私を強くしてくれました。そして、私の中に自信がついてきました。壁を乗り越える中でついた「自信」は、私を変えてくれました。

今まで、何をするにも消極的で、誰かに頼ってばかりだった私ですが、自分の思っていることを表に出せるようになってきたのです。

私は現在、学校の生徒会執行部の一員として、日々活動しています。自分に自信がもてたことで、自分が変わり、自分が変わることで、今まで見えなかったことも見えてきました。気付くと、積極的に何でも挑戦する自分がいました。そしていじめはなくなりました。

私が標的となった「いじめ」。いじめる側も、それを黙認する周囲も、自分に自信がもてずに苦しみ、誰かを傷付けることで、自信に変わる満足感を得ようとしているのだと思います。また、過去の私のようにいじめに対して、何もできず、自信をもてず、悔み続けている人も、きっとたくさんいます。そんな人達に対して、私は言いたいです。

「自分を変える、小さな一歩を踏み出してみませんか？」

私にとっての柔道の様に、自分を認め、自信がもてる一歩が、みなさんの身の周りの中に必ずあるはずです。小さなことでいい、何か一つでも諦めないでやり通してください。自分の力で、辛くても、苦しくても乗り越えることが自分の糧、自信になります。そして、自信をつけた自分、変わった自分から見える景色は、今とはきっと違うはずです。私がそうだったように、きっと私達は変われるはずです。全ては自分を信じて踏み出す、小さな一歩から始まります！！

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

過去の私のように、いじめに立ち向かうことのできない、自分に自信をもてず、一歩を踏み出せない人。いじめを見ているにも関わらず黙認している人。そして、人をいじめ自信に代わる満足感を得ようとしている人達に自分を変えてもらうため届けたいです。また、新しいことに挑戦しようか迷っている人達がこの主張を聞いて、少しでも自分を信じて、自分を変えていく、未来を切り開いていく一歩を踏み出してもらえたらいいなと思います。



入賞

ボランティアってめんどくさい！？

岩手県立沼宮内中学校 3年

三 浦 巴 那 (みうら はな)

「またボランティア？めんどくさい。」
こう言っている人を見ると、つい2年前の自分を思い出します。

「うんうん、私もそうだった。募金はするけど、朝早くに並んで大きな声を出すのって恥ずかしいんだよねー。いい子ぶってると思われたら嫌だし、って思ったー。」

でも、同時に残念な気持ちにもなるのです。ボランティアって本当は、心が育つ素晴らしいものなのに。私がこのように思うことができたのは、先輩方の活動があったからです。

2年前、先輩方は、西日本豪雨災害で被害を受けた方々に対して募金活動を企画し、全校に呼びかけをしていました。この呼びかけに賛同し、一緒に活動したのは、1年生から3年生までの21人。集まった募金は、被災地と岡山県の真備東中学校に贈られました。

「街は壊れても絆は壊れません。遠い岩手の地から応援しています。」

という熱い励ましの色紙とともに。真備東中は豪雨で1階が完全に水没。災害ゴミの受け入れ場となったため、校庭には校舎の2階の高さまでゴミが積み上げられ、大切な学び舎ががれきの山と化してしまいました。

「早く立ち直ってほしい、同じ中学生の仲間に笑顔が戻ってほしい。」

募金活動には先輩方のそんな願いが込められていたのです。

でも、あの頃の私はこの活動に参加しませんでした。「いい子ぶっている」と思われたくなかったのです。しかし、あるできごとを境に私の考えは一変します。真備東中からのお礼の手紙を読んだのです。

「沼宮内中学校の皆様へ

災害により、みんながばらばらになり、学校に通えない状態が続いていました。また、今まであたり前だったことが、なにひとつできない状況になりました。ですが、皆様の支えがあったおかげで、今までのように元気で、楽しく、笑顔いっぱいの日々を過ごせています。本当にありがとうございます。真備東中学校 生徒会執行部」

このメッセージを読んだとき、私は会ったこともない人達とつながることができた、という喜びが湧いてくるのを感じました。自分の小さな募金活動が人を笑顔にすることができたのです。自分の心が、

「いいことをした！」

という自信に満ちていくのを感じました。手紙の最後にはこんな一文がありました。

「これからは皆様のよう、困っている人がいたら手を差し伸べる人になれるよう、頑張っていきます。」

この文から、ボランティアは、助け合いの連鎖を生み出す、ということを知ることができました。めんどくさい、はずかしいという気持ちは、スッと消えていました。

2年生になり、生徒会執行部となった私は、先輩方とともに台風の被災地、宮城県丸森町の小学校を支援するための募金活動を企画しました。このときは、60人以上もの生徒が賛同してくれました。

そして3年生となった私たち生徒会は「気配りと優しさを大切にする学校にしたい」という思いから、「ちょっぴりボランティア」略して「チョボラ」の活動を行っています。周りを見回して気づいた小さな困り事を、進んで解決しようというものです。ゴミ拾いや窓の開け閉め、誰かの重い荷物を一緒にもってあげる、など生活の中の多種多様なボランティアを一人ひとりが自主的に行っています。

「めんどくさい。」

と言う人もいますが、それを上回る多くの生徒が、

「人の役に立てて気持ちよかった。」

と感想を述べています。回を重ねるたびに、

「チョボラしてくれた人に感謝している、ありがとう。」

「次は私もやってみたい。」

という声が聞こえてきます。助け合いの連鎖が生まれているのです。

先輩方のように大々的なものではないけれど、私たち生徒会が根気強く取り組んでいる「チョボラ」の種は、確実にその意味をもち、どんどん根をはり、葉を広げ、今まさに絆という花を咲かせようとしているのです。ボランティアとは、決してめんどくさいものではありません。誰にでもある「思いやりの心」です。それは、世界人類共通のものであり、区別はない。たとえ小さなボランティアでも必ず大きな「笑顔」につながることを願っています。そして、私はこれからも「仲間との支え合い」の連鎖が広がっていくことを願っています。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

1) 生徒会のボランティア活動を行う際、「めんどくさい」と言っている人を見て、昔の自分と重なり、ボランティアは素晴らしいものだと思えたからです。2) この主張は、ボランティアをめんどくさいものと思っている人はもちろん、「ボランティアに参加したいけど勇気がでない」そんな人にもきいてほしいです。3) 大好きなことはできなくても、周りに気を配って生活の中のささいな優しさを発揮できるような人間になりたいです。



入賞

同じ人間なのに

紫波町立紫波第一中学校 3年

菅原 彩希（すがわら さき）

私はよく、本やテレビなどで、身体に障がいを持った人達に対する差別やいじめといったものを目にします。

最近、新型コロナウイルスの感染者に対して差別している人も多いようです。関東方面から帰省した人に対する誹謗中傷の張り紙、県外ナンバーの車に傷を付ける行為、とても心が痛みます。

学校内でも、特別支援学級に通う生徒達を、特別に見るような態度をとっている人がいるという話を、先生から聞いたことがあります。私が通う学校には、「けやき学級」という、特別支援学級があります。そこに通う生徒達に対して、廊下で「けやき！けやき！」と、わざと呼びかけたり、教室の前を通るとき、ドアを叩いたりしているようです。かつて実際にあったことです。今はそんなことはありませんが、話を聞くにつれ、とても辛い気持ちになります。

私は、「アスペルガー症候群」という、目に見えない発達障害を持って生まれてきました。

小学校に入る前に、保育園で「おまえ病気なんだろう？」と突然言われ、何のことか分からず、びっくりしました。私は、入院したこともないし、身体に不自由なところもないのに…

その障がいのことを初めて知ったのが、小学校1年生か、2年生の時です。私って病気なのかな…普通の人と違うのかな…人と違うってことは悪いことなのかな…自分ではどうすることもできないのに…と悩み始めたのです。

そして、母に「発達障害ってなおるの！？なおらないの！？」「何で私だけ皆と違うの！？」とくっつかかったのです。自分がそのような障がいを持っていることが信じられなかったし、自分だけ人と違うということが悔しかったのです。

「障害者差別解消法」という法律を知っていますか？2016年に制定されたこの法律は、全ての国

民が障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら、共生する社会の実現につなげることを目的としています。

このような法律が定められるくらいに、現代社会には、「皆と違うている。」「特別だ。」「怖い」「気持ち悪い」なんて言葉を軽々しく放っている人の姿があります。

彼らも、私もそうですが、好きで障がい者になったわけではないし、どんな身体で生まれたとしても、誰だって自由に生きる権利があるはずです。

それなのに、どうして差別したり、いじめに発展してしまったりするのだろうか。同じ人間ではないか。私は疑問に思っています。法律まで作らなければならない社会は、正しいのでしょうか。

障がいを持った人達だけでなく、健常者からすれば、何か違うと思われている人達が、「自分はここで生きていていいんだ。」と思えるようにするには、差別をなくす必要があります。

障がいは個性であり、皆さんと同じように「できる、できない」があります。だれでも普通に買い物をしたり、旅行に行ったり、働いたりしたいのです。そのために、もっとメディアを通して、障がいに対する偏見をなくし、幼い頃から障がいを持つ子とふれあったり、大人が障がいに対して本当の意味で理解し、子どもたちに伝えるべきです。

私は、障がい者も健常者も分け隔てなく、幸せに過ごせる未来のために、誰も排除されない社会を実現するために、障がい者も普通に過ごしたいという思いを持って生きていることを、これからもより多くの人達に伝えていきたいです。

忘れてはなりません。障がいがあるがなかろうが、私たちは「同じ人間」だということを。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

もし出来るのならば、この世界の1人1人に聞いてもらいたいです。まず、この世の中には、障がい者に限らず、今でも周りとは違うということで差別を受けている人がいると思います。そのような人達に「自分も生きる権利がある！」と自信を持ってもらいたいです。それから、まだこのようなことを知らないという人がいたら、知ってもらって、誰もが分け隔てられることなく、平等で、平和で、より幸せな世界を、皆でつくり上げていきたいです。



入賞

「恐れ」と向き合って

金ヶ崎町立金ヶ崎中学校 3年

鈴木 香 桜（すずき かお）

どうして私は兄のようになれないのだろう。

私には2つ上の兄がいます。兄は、強い芯をもっていてぶれない人。リーダーとして認められている人です。小学校の時は、いわゆる問題児でした。しかし、6年生の時の担任の先生の影響で、リーダーとして活躍するようになりました。中学校では応援団長、高校では生徒会長を務めています。学校の顔として今日もみんなの前に立っています。

「ちゃんとやれよ!」「ちゃんとやってるよ!」

サッカーの試合中、キーパーである兄が叫びました。高校1年生の兄が、3年生の先輩に向かって、物怖じせず、怒鳴ったのです。負けじと怒鳴り返した先輩。そんな彼らの姿は、衝撃的でした。

兄弟なのだから、私もそんな風になれるのだと、ずっと思っていました。私は、生徒会選挙に立候補すると決めました。兄はラインで、「批判がくるぐらいの活動にしろ。」とアドバイスをくれました。つまり、たとえみんなが賛成しなくても、自分が正しいと思ったことを貫けという意味です。

テニス部のキャプテンとして、私はこれができませんでした。

あるとき、私は生徒会の活動があり、練習に遅れていきました。すると、なんとなくだらけた雰囲気があり、私は「声だして」「行動すばやく」と言いました。

その時の、私を見るみんなの目。声をかければかけるほど、みんなとの距離ができていくようでした。苦しくて、私は声を出すのをやめてしまいました。みんなの色々な態度に対して、見て見ぬふりをするようになりました。そうしているうちに、あっという間に引退の日がきました。自分がキャプテンとして何もできなかったこと、今でも後悔しています。リーダーとして、孤立や批判を恐れずやりきるべきでした。あの時、みんなにちゃんと向き合っていたら、もっと良いチーム、も

っといい関係が築けたはずです。中途半端に声をかけるだけで、逃げ出してしまった私。このままでは、私は兄のようになれない。そしてあの日の「自分」を超えることができない。

みなさんは、自分自身のことが好きですか。私は今の自分を「好き」とは言えません。日本は他の国に比べて、自分自身に満足している人の割合が低いという調査結果があります。自分に満足している人は、たった45パーセントなのです。さらに私が衝撃的だったのは、日本の10代前半の死因1位が「自殺」だったことです。自殺の原因はさまざまだと思いますが、今の日本に、私たちに必要なのは自分を好きになることではないでしょうか。では、世界中の人が自分を好きになるには、どうしたらいいのでしょうか。私が私を好きになるには、どうしたらいいのでしょうか。

今私は生徒会として、少しずつではありますが、自分の意見を言えるようになっていきます。今でも、怖いけど。今立ち向かって行けば、未来は明るくなると気づきはじめてから。もっと自分の意見を、自分の思いを伝えていきたい、今ではそう思っています。

私は自分を好きになるために、恐れていることに立ち向かおうとしています。私が恐れていたことは「人が離れていくこと」でした。でも、人から嫌われることを恐れて、自分の思いを貫かないと、好きな自分に近づくことができないとわかってきました。

あなたの「恐れ」は、なんですか？自分を好きになるために、あなたも自分の恐れを見つめ、立ち向かってほしいです。自分を認めるために。自分を好きになるために。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、自分自身に満足できず、自分を好きになれない人にこの主張を届けたいです。世界中の人に、自分自身のことを好きになってほしいと思っていますが日本の若い世代は、6割の人が自分に満足していないという調査結果があります。恐れをみつめ恐れに立ち向かうことで、自分のことを好きになってほしいです。



入賞

心のディスタンスは要らない

岩手県立一関第一高等学校附属中学校 3年

佐藤 優奈 (さとう ゆうな)

病気による差別や偏見は、人間としての尊厳を打ち砕く。これは伊波敏男という 77 歳の作家が著書の中で訴えていることです。彼は、今の私の年齢と同じ 14 歳の時から長い歳月をハンセン病療養所で過ごしました。

社会の授業で、基本的人権について学習した時に、ハンセン病のことを知りました。昔はとても恐ろしい伝染病だとされていたハンセン病ですが、近年では、感染力が弱く、ほとんど発病しないことが分かっています。また、有効な治療法も確立されています。それに関わらず、患者とその家族は、差別や偏見により、胸が押しつぶされるほどの苦しみを味わってきました。

このような人権侵害の根底には、病気に対する恐れ以上に、地域社会からの誹謗中傷への強い恐怖があるのではないのでしょうか。

さて、今年は、日本のみならず、世界各国で、新型コロナウイルスの感染が猛威を振るっています。収束が見えにくいこの病気を恐れる一方で、罹患した人の人権を侵害する問題が起きています。

ある県では感染者の家に石が投げ込まれたり、引っ越しを余儀なくされたというニュースを見ました。また、ある県では、感染者に対して犯人捜しのような行為が行われ、個人情報やネットにあげられたという深刻な問題も報道で知りました。さらに信じられないことに、心ない偏見は医療従事者やその家族にも向けられています。

そして、岩手県でも、遂に初の感染者が出た時に、とても残念なことに、ほかの県と同じように、患者に対する誹謗中傷が始まってしまいました。勤務先に 100 件以上の中傷の電話やメールが殺到し、職場が疲弊していたとのことでした。

もしも私や私の親が、コロナに感染してしまったら、学校でクラスで、私はどうすればいいのだ

ろう。この不安は病気に対する恐れ以上に、風評や差別に対する恐怖そのものです。もしもあなたやあなたの家族だったらどうでしょうか。

「その日から、生活ががらりと変わりました。近所の人からは白い目で見られるようになり、学校でも仲間はずれにされました。掃除の時も、同じバケツで雑巾を洗わせてもらえず、「お前が触るとうつる」といわれ、雑巾を投げられました。」

これは、お父さんがハンセン病患者だった女性の言葉です。ハンセン病と新型コロナウイルスとは、病気の特徴や背景は違います。しかし、偏見や差別が人の心を蝕み、人としての尊厳を打ち砕く様は同じではないかと私は気付きました。私の身の周りでももしもこのような差別や誹謗中傷が起きたとしたらとても悲しくなりません。

病気は確かに恐ろしい。しかし、日本をはじめ世界中の医療従事者が、必死で薬の開発や治療に尽力してくれています。私たちは、この病気を正しく恐れつつ、医療の力を信じ立ち向かっていきましょう。病気は薬で治るけれど、偏見という名の心のウイルスは、どんな薬でも抑える事はできません。どんどん広がり、人の心を蝕み続け、穏やかな日常を奪います。奪われた日常は、二度と元には戻らないのです。

予測できない難しい状況の今こそ、思いやりと冷静な行動で、今の暮らしを一緒に守りたい。この考えを、私は学校で訴え、全校で共有しました。これからも、一人でも多くの人に伝え続けたいのです。患者も医療従事者も安心して治療に専念できるように。そして社会全体が優しい気持ちであふれるように。心のディスタンスは要らない。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

一人でも多くの人にこの主張を届けたいです。誰しも新型コロナウイルスに感染する可能性があるからこそ偏見や差別が人の心を蝕み、人間としての尊厳を打ち砕くことを知ってほしいのです。もしもあなたの身の周りで感染者が出たとしても絶対に差別行動をしないでください。予測できない難しい状況の今こそ思いやりと冷静な行動が必要なのです。そうする事で、穏やかな日常を守る事ができます。感染拡大を防ぐため、ソーシャルディスタンスは必要ですが、心のディスタンスは要らないのです。



入賞

命輝く未来へ

一関市立藤沢中学校 3年

佐藤 早和子（さとう さわこ）

みなさんは、日本で年間2万人の人が自ら命を絶っていることを知っていますか。もし、この2万人のうちの一人が、すぐ身近にいる大切な人や、あなたの知っている人だったら、その命の重さをわずかでも想像することができるでしょうか。

3カ月の間に、2人の芸能人が、自ら命を絶しました。これから続いていく人生や、仕事への希望に満ち溢れていたはずなのに、彼らの希望は「SNSでの誹謗中傷によって奪われてしまった」と報道されていました。「大好きだったのに」「置いていかないで」ファンの悲しむ声が響きました。確かに、自分で死を選択することは絶対にしてはいけないことです。しかし、根拠のない悪口に苦しみ、心の奥深くをいくつものナイフで刺され、死を決意する人が世の中には沢山いるのです。

私は、まだ歩き始めたばかりの幼い頃、池に落ちて溺れるという事故に遭いました。母が見つけてくれた時には、赤いパンツに赤い靴を履いたまま、うつぶせで池に浮いていたそうです。母がはだしのまま池に入り、抱き上げた時には、私の小さな唇は青紫色に染まり呼吸もしていませんでした。母は泣きながら父を呼び、私を父に預け、救急車を呼びました。その間に消防団だった父が、私を逆さにして背中をドンドンとたたきました。すると私は池の汚い水を吐き出し、泣き出したそうです。父の素早い対応で助かることができましたが、あと1分1秒でも遅かったら、今、私は、生きてここにいなかったかもしれないと母が教えてくれました。

この話をする時、母はいつも私にこう言います。

「あの時、早和子が死んでいたら、私も後を追っていたかもしれない。」

その言葉を聞く度、私は心から「生きていてよか

った」「救ってもらったこの命、もっと大切にしよう」と思うのです。

今日まで過ごしてきた当たり前の日常と、大切な家族がそばにいることは、とても幸せなことだと思います。それと同時に、自分や自分の大切な人、身近な人がこの世からいなくなることの恐ろしさも感じます。

命があるからこそ、今がある。そんな幸せな日常に見向きもせず、「死ねばいいのに」「消えろよ」という心無い言葉を、自分の名前も明かさずに書き込む人たち。そして、それは決してSNSの中のことだけではありません。誰かを傷つけた人を不快にさせる言葉、根拠のない悪口といった形で、実は、私たちの日常の中にも沢山潜んでいるのです。

私は、父や母、周りの人たちが救ってくれたこの命がある限り、自分の言葉で誰かを傷つけるのではなく、助けられるような人になりたいです。心ない言葉で傷つけ合うのではなく、互いの気持ちや命を尊重しあい、支え合える世の中にしていきたいと考えています。

人はいつか必ず死を迎える時がきます。私たちは、この儚く尊い命を、10年、20年先の未来へとつなげていかなければなりません。だからこそ、自分と誰かの命をもっと大切に考えていきたいのです。優しい気持ちやあたたかな言葉こそが、人に力を与え、苦しんでいる誰かを救えるのではないかと考えます。

私とあなたで、私たちみんなで、生きていてよかったと思える、一人一人の命が輝く未来を、今、創りだしていきましょう。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

命をもつすべての人に届けたいです。情報が一瞬にして伝わり、簡単に誰かを傷つけてしまう現代社会。もし、あなたの言葉でこんな世界を変えていくことができるなら、私たちは明るい未来へ動き出すことができると思います。私の主張が、命輝く未来へと動き出すきっかけとなり、一人でも多くの人が、生きる喜びを感じることができたらと思います。



入賞

あなたの勇気から

大船渡市立綾里中学校 3年

花 輪 日葉里（はなわ ひまり）

「One child, one teacher one book, one pen can change the world. 私たちは自らの権利を求めて声を上げ、私たちの言葉で世界を変えることができる。」2013年7月12日、マララ・ユスフザイさんは、国連本部でこう述べました。この時彼女は、16歳。私とは1歳しか変わらないのにも関わらず、武装勢力に命を狙われながらも果敢に行動する姿。私は驚き、感動しました。しかし、こんな大きなことは、自分にはできないことだとも思っていました。

そんなある日、ある新聞記事を見て、その考えが間違っていたことに気づいたのです。その記事では、私と同年代の人たちが、このコロナ禍の中、活動していることが紹介されていました。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、不足していたマスクを、600枚手作りし、高齢者や子どもに届けてほしいと県に寄付した中学生。コロナウイルスと闘う医療従事者のために、フェースシールドを贈った高校生等。彼らは、「コロナに負けずに、頑張っている」「コロナと戦ってくれてありがとう」という、激励や感謝の気持ちで、自ら進んで行動していました。私は、これらの記事を見て、自分にもできることがあるのではないかと考えるようになりました。そして、私も何かしたいという気持ちが湧き上がってきました。

そこで、生徒会執行部に所属している私は、他の生徒会メンバーと、自分たちが今できることはないか意見を出し合いました。募金、マスク寄贈など、たくさんのアイディアが出されました、また、身近な方のために、できることから始めようということになり、普段私たちの健康を見守り、現在は新型コロナウイルス感染防止のために、命

がけで闘っている学校医の方々に、メッセージを贈ることにしました。全校にこの提案をすると、全校のみんなも快く受け入れてくれました。早速激励や感謝の気持ちをしたためのカードを色紙に貼り、学校医さんに贈りました。

数日後、色紙を贈った学校医さんから「励みになります、ありがとうございます」という内容のお返事をいただきました。こちらの気持ちが通じ、相手から感謝の気持ちを示されたことをとても嬉しく感じました。正直なところ、この企画を提案したときは、初めての活動ということもあり、上手くいくかどうか不安がありましたが、やってよかったと思いました。同時に、少し勇気を出して行動してみることで、他の人の協力を得られ、その結果、他の誰かの心の支えにもなるということも知りました。私たちのこの活動は、新聞等でも紹介されました。これを見た他の人が行動するきっかけになってもらえれば嬉しいです。

行動するためには、時に、勇気が必要になるかも知れませんが、本当に身近なことで、出来ることからでよいのだと思います。大切なのは、強い思いをもつこと、初めの一步を踏み出すことなのです。あなたの初めの一步が、他の人に勇気を与え、勇気もらった人が、また行動する。初めの勇気が、次の人の背中を押す力へと変わっていくのです。そしてそれは、やがて大きな変化を促す力になる。あなたも初めの一步を踏み出してみませんか。言葉で、行動で、世界を動かしたマララさんのように。

○ この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

何かを変えたいと思った時に、自分1人で大きなことを起こすことはとても勇気がいります。誰でも、変化を起こすには他の人の協力が必要不可欠です。私は今まで、物事は1人でやり遂げ、他の人に迷惑をかけないようにと思っていました。しかし、一步を踏み出すことで、自分の思いが他の人に繋がっていくということを、今回改めて知ることができました。自分の踏み出した「初めの一步」から学んだ大きな変化を促す人との繋がりを大切に、これからの人生を歩んでいきたいです。



入賞

新時代を強く生きていく～これから始まる私の道～

遠野市立遠野東中学校 3年

菊池 恭護 (きくち きょうご)

平成に生まれ令和の時代を生きる私たち。今、新型コロナウイルスが蔓延し、世界中でたくさんの人が戦っている。

特にこの病気は、高齢者や基礎疾患があり、抗がん剤や免疫抑制剤を服用している人などが重症化すると言われ、私はその薬を服用している。

2年前、中学校に入学した私は、幼い頃からケガが多かったので、無理をしないという約束でバスケット部に入部した。不安もあったが、何とか練習についていき、試合にも出してもらえるようになっていった。また、当時の生徒会長の姿に憧れ、私ももっとよりよい学校にしたいと思い、生徒会副会長に挑戦した。しかし、充実した学校生活を一変する出来事が起こったのです。

冬休み明けテストが行われた日、朝からとても強い倦怠感があり、身体中が異常に浮腫んでいる。痛いところはない。ただただ、だるい…。そのことを夕方、母に伝えるとすぐに病院に行こうと言われ、病院に向かった。

診察を終え、すぐに色々な検査が行われ、先生から

「今すぐに入院してください…腎臓に異常があり治療が必要です。2、3ヶ月は入院になります。」と告げられました。私は頭が真っ白になりました。明日から学校に行けない。部活は？生徒会は？頭の中は、不安と恐怖でいっぱいになりました。告げられた病名は、ネフローゼ症候群。小児では年間1,300人、約2万人に1人の確率で発症し、一度の治療で完治できるのは3割程度、7割は再発を繰り返すと言われている難病の一つです。

私が入院した病院には長期入院する生徒のための院内学校がありました。勉強だけでも皆に遅れなくなかった私は、入院から2日後には転校することが決まりました。しかし、現実には甘くなかったのです。浮腫は、普段の体重の6キロ以上。運動制限と食事制限。なぜ自分が…もっと早く気付いていれば。思い返せば数ヶ月前から身体の異常があり、心配した家族は病院へ連れて行ってくれ

ていたのです。しかし、そのときは検査をしても、何も異常はなかったのです。

入院してから飲み続けた薬は、副作用が色々ありました。顔面浮腫とも言われ、顔が月のように丸くなる。顔や身体中にできる吹き出物、感染症にかかりやすく重症化する。そして、何よりも辛かったのは、成長障害があり、身長が止まってしまふこと。

ようやく外泊許可をもらって修了式に参加できた私は、あの一日を一生忘れることはありません。久しぶりに吸った外の空気、毎日当たり前に通っていた学校なのに、とても緊張したこと。副作用で変化した私に対していつもと変わらず接してくれたこと。サプライズでの皆からの贈り物、あのときの感動は言葉にすることはできません。

しかし、昨年9月。風邪を引いたことにより再発。また、あの薬を飲むことに。皆と同じ生活をするのができず、苦しい日々が始まりました。

けれども、辛い思いをしているのは私だけではありません。病気のせいにして自分にできることを辞めたくない。困ったときは、仲間が助けてくれました。そして、部活で苦しい時、

「大丈夫か？」

と声をかけ、肩をたたいてくれた仲間にも何度も励まされました。

最初の発症から1年7ヶ月。皆に支えられバスケット部の部長になり、生徒会長になることができました。そして、今も免疫治療が続いており、これから先もこの病気と向き合っていかなければなりません。あの当時から変わらない身長…。辛いことや悔しいことの方が多かった日々の中で、当たり前のことを当たり前にできる幸せ、家族への感謝の気持ち、友達との大切な絆。病気になったことでたくさんのことを感じることができました。

令和という新しい時代は、まだ始まったばかり。新型の病気とも戦っていかなくてはなりません。これから始まる長い道に、どんな困難があっても前だけを見て、強く生きていきます。

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

1番のきっかけになったこと。それは新型コロナウイルスが発症したことです。私の病気は感染症にならないことが1番の再発防止です。再発したくない一心で体調管理をしていた矢先、コロナウイルス感染症の問題が起きました。沢山の葛藤や困難はありましたが、今だからこそ私にしか出来ないこと、伝わるものがあるのではないかと思います。挑戦したいと決めました。私の言葉で1人でも多くの人に勇気をもってもらえたら嬉しいです。



入賞

地球に生きる

岩泉町立小川中学校 3年

遠藤 未羽（えんどう みう）

「ハロー」「你好」これらの言葉を知っていますか。そう、日本語で言う「こんにちは」です。知っている人も多いのではないのでしょうか。では、この言葉は。「請多指教」分かった人はいますか。おそらく分からない人もたくさんいますよね。今の言葉は「よろしくお願いします」という意味です。

たしかに、この世界には「言葉の壁」というものが、間違いなく存在するのです。けれども、そんなものは必死で勉強すればどうにでもなる、と私は思いますし、最近では翻訳機も非常に発達してきています。これから先、言葉の壁の問題はどんどん消えていくに違いありません。しかし、色々な物の発達だけでは壊すことのできない壁がある。それが「心の壁」です。最近、国と国との間に、心の壁が高くそびえ立っている気がしてならないのです。

2019年冬、中国から広がったとされる新型コロナウイルス。その被害は甚大で、世界中で多くの死者がでました。そして、現在でも人々を苦しめています。この「苦しめている」というのは、もちろん「感染症」としての面もあります。ただ、今回私が伝えたいのは別の面、「差別」で苦しんでいる人がたくさんいるということです。

特に、中国を筆頭にしたアジア系の人々への差別はひどい。「ウイルスを持ち込むな、帰れ」「お前は猿だ」「本当にネズミを食べているのか」こんな言葉が向けられたそうです。カナダの研究所の世論調査では、中国系住民の約半数が被害にあったと回答しています。

このようなニュースを見る度に、胸が締め付けられるような気持ちになります。それは、私が実際に体験した、素晴らしい出会いによるものです。

私は昨年、岩泉町で行われている海外派遣事業に希望して、台湾で様々なことを体験させてもらいました。台湾は中国と海を挟んで隣接する国ですから、先程話したような差別も最近はあったようです。

しかし、私がこの体で体験してきた台湾は、差別されるのがおかしい、素敵な国です。活気あふ

れる夜市、おいしい食べ物、気候を生かした植物栽培、近代的な建造物。どれも私の心を躍らすようなものばかりでした。

私がさらに驚いたのは、台湾と日本とで似ている点が多かったことです。街並や木造の建築、鉄道、さらにはキャラクターまで、日本をまねているものが多くありました。詳しく調べてみると、台湾という国は親日家が多いことでも有名な国です。

あるお店でお土産を選んでいたらのこと。台湾人のお客さんに突然声をかけられました。

「あなたは日本人ですか。」

「はい、そうですけど…。」

「わー、会えて嬉しいです。」

そう言って、肩を揺さぶられました。びっくりしました。それは突然話かけられたからでも、揺さぶられたからでもなく、台湾の方が日本語で話しかけてきたからです。他の国の人が言葉の壁を越えて日本語で話しかけてくれ、日本人を歓迎してくれている。私にはこの数秒の出来事が本当に嬉しかった。

私はこんな素敵な体験をさせてもらったので、日本以外の国も好きになることができました。だから、台湾もそうですし、国と国との間での差別がニュースになっていると、とても悲しくなります。

今回、世界中に大きな被害をもたらしている新型コロナウイルス。このウイルスがきっかけとなり、世界中でいくつもの心の壁が出現することを皆さんは望みますか。私が体験したように、他の国をよく見てみると素敵な所がたくさんありませんか。異質なものとして否定するのではなく、素敵なものをどんどん受け入れる。そうすることで、様々な国がより良い国になっていくはずですよ。さあ、まずは自分の中にある心の壁を、一緒に壊していきましょう。そして、共に歩いていくのです。同じ「地球に生きる」者として。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を、コロナにかかっている人に対して良く思っていない人や、コロナの発源地である中国などを批判している人、そして、その被害に遭っている方々へ届けたいと思います。批判している人達には、その言葉で苦しんでいる人が大勢いる事や大きな事件に発展する可能性もある事を、被害に遭っている人達には、批判に負けず、差別で苦しんでいる人に声をかけてあげられるような強い心を持ってほしいことを伝えたいです。



入賞

老いと向き合う

洋野町立種市中学校 3年

田毛 咲羽（たけ さわね）

「じいさん、お風呂の電気まだ付いでだったよ」
今年で77歳になる祖父は、お風呂や部屋の電気、ストーブやテレビ、いろいろなスイッチを消し忘れることがよくあります。

3年前、祖父は仕事中に倒れて救急車で運ばれました。熱中症で運ばれたんだろうくらいの軽い気持ちで病院に駆けつけた私は、話しかけても反応しない祖父の姿を直視することができませんでした。

左半身に麻痺が残った祖父は、半年ほどリハビリして家に戻ってきました。でも、「やっと帰ってきた！」という喜びの気持ちは、「付き合ってもらえない！」という苛立ちの気持ちにすぐ変わってしまいました。学校から疲れて帰ってくると、具合が悪くなるほどの大音量でテレビを見ている祖父。「咲羽、そご寄げてけろ」と言っていて私が座っていた場所に平気で座ってくる祖父。通れなくて邪魔なのに足を延ばしてよけない祖父。何より、一日中何もせず、家の中で横になってばかりいる祖父に苛立ちを抑えられなくなっていました。

「何でそんなにテレビの音おっきくするの！」
「私がソファに座ってたの！何で座るの！」
いらいらがつのった私は、祖父に罵声を浴びせていました。

ある日、お湯をずっと出しっぱなしにしていた祖父のせいで、給湯器のお湯が空になってしまいました。「水しかでないなんて、まじ最悪」と思った私の心を読んだのか、母は私に言いました。「こういう時は絶対に怒っちゃダメなんだよ」「じいちゃんは今まで誰よりも働いてきた分、今休んでるんだよ。あんなに休まないで稼いでたんだから、

その分休ませてあげたいよね。」

私ははっと胸をつかれました。そして、元気な頃の祖父と倒れてからの祖父を単純に比べて、変わってしまった祖父をうとましくさえ感じていた自分が情けなくなりました。祖父は毎日、午前3時に起きてボイラーの仕事や鉄筋の加工をしていました。家の中でも中心になって畑仕事をしていました。誰よりも働いていた祖父。その時、初めて私は自分の誤ちに気付きました。

「じいさん、お風呂電気まだ付いでだったよ」という祖母の声を聞き、妹と争って消しにいくのが、今では当たり前の日常です。「水は止めた？」というメッセージボードを作ったり、祖父が出かける時は可能な限り一緒に行くようにしています。いつも私が座っている場所も気持ちよく譲れるようにもなりました。それは、今まで頑張ってくれた祖父に対して、感謝と尊敬の気持ちを持てるようになったからです。

総人口1億2千万人のうち、65歳以上の割合は約3割。超高齢化社会を迎える中で、一人暮らしのお年寄りが増えているといえます。でも、私は祖父母と一緒に暮らしたいです。一緒にいることで、たくさんのことを学び、考えることができたのです。

老いは、誰もが向かえる人生のゴールです。そして老いとは、懸命に働き社会に貢献した証だと思います。だからこそ、社会全体で感謝し、お年寄りを大切にすべきなのではないでしょうか。私は、今日も祖父のサポートをしています。それが祖父を支え、そして社会を支える一歩となるのだから。

○ この主張をどんな人に届けたいですか？

少子高齢化が進み、65歳以上の割合が増え続けている反面、お年寄りを避ける傾向があります。老いは、誰もが向かえる人生のゴールであり、社会に貢献した証である。という私の主張について、1人でも多くの人が賛同してくれて、お年寄りに対する見方を変えてくれればうれしいと思っています。



入賞

故郷

二戸市立浄法寺中学校 3年

安ヶ平 海 永（やすがひら かいと）

JAPAN。この単語は、「日本」の他に、「漆」も意味します。

皆さんの住んでいる地域の魅力は何ですか。私は、今はなき「浄法寺町」で、最後に生まれた子供の一人です。私の住んでいる地域の誇れるものの一つに、「漆」があります。漆と聞くと「地味な作業」「値段が高い」といったイメージを持つ人が多くいると思いますが、食器としては、半永久的に使えるものですし、重要文化財の修復にも使用されています。

私が初めて「漆」と出会ったのは、小学6年生の、総合的な学習の時間です。「地元の産業をPRしよう」というテーマで、5つの産業を軸とし、プレゼンテーションを行いました。その結果、私の所属する「漆グループ」の案が採用され、地域の福祉事業所の協力を得、パンで地元をPRすることになりました。

パンの材料、価格、形などについて話し合いました。何度も意見を交わし、試作を重ねて作りあげられた商品は「じゃパン」と命名され、その後は、ポスターやしおりを使っのPR、二戸市内の観光物産センターや県内にあるデパートで販売を行いました。多くの苦労はありましたが、この取り組みを通し、地域のPRに少しながら貢献できた喜びを感じることが出来ました。

中学1年の冬には、都内で浄法寺のPRを、昨年11月13日の「うるしの日」には、漆の植樹体験もしました。

そして今年に入り、漆組合の方からお話を伺い、人口の減少に伴い、漆職人の数も減少していることを知り、地域の危機を感じました。

そのような中、二戸市は、漆に興味があり、ゆくゆくは漆関連産業で自立を目指す「うるしびと」を地域おこし協力隊として、全国から募集していることも知りました。

また、6月19日には、浄法寺の漆産業が、地域の歴史的魅力や特色を通じ、日本の文化、伝統を語るストーリーとして、文化庁から「日本遺産」の認定を受けました。

このように多くの方が浄法寺の産業を支えてくださっているのに、「自分はこれでいいのか」「このままでいいのか」「何か出来ることはないのか」自問自答を繰り返しました。そしてたどりついた答えが「故郷を学び、故郷に学ぶ」ことでした。

つまり、まずは自分が、地域が抱えている問題を知ること。そして、地域が今必要としている思いに、応えられるようになること。さらには、伝統や宝を、私たち若い世代が守り、繋いでいく、ということです。

祖父は最近、耕作を放棄された土地に漆を植えるため、100本の苗木を注文しました。成長したら、祖父と一緒に漆を掻きたいとも思っています。それが祖父にとっての喜びでもあり、地域の文化伝承にも繋がるとも考えます。

将来、どのような仕事に就くかはまだ分かりませんが生まれ育った浄法寺の象徴であり、宝でもある「漆」に携われることを、強く、強く願っています。

○ この作品を書いたきっかけはなんですか？

小学校高学年の頃から地域の特産である漆について触れる機会が多くあり、その中で浄法寺の漆産業の現状を知りました。今年6月に日本遺産に認定され、浄法寺の宝から日本の宝になったことも知り、「自分も何か力になりたい」と思うようになりました。そして、私のような若い世代が地元の伝統や宝を守り、繋いでいくべきだと強く感じたことです。

審査委員長講評

(株)岩手日報社論説委員会委員長 郷右近 勤

それでは審査委員会の講評をさせていただきます。

まずは具体的な話に入る前に、この大会の名前は「わたしの主張」ですね。この「わたしの主張」とはどういうことなのでしょう。自分の意見というのは誰にもあるわけですが、それは自分の胸の中に秘めておくこともできます。ところが今日は、その自分の意見を公にして、しかも多くの人に認めてもらわなければなりません。

では、自分の意見を認めてもらうにはどのようにしたらいいのでしょうか。まさに皆さんもそこに頭を悩ませたであろうと思います。

結論から言いますと「主張」ということは、相手の「共感」を得るための作業です。自分の話を聞いてもらう。あるいは自分の文章を読んでもらう。それはどのように聞き手、読み手の共感を得るか、その作業に尽きると思います。

そのような観点から今日の感想を申し上げますと、まず今の最大の関心事は新型コロナウイルスですね。この新型コロナをめぐる差別の問題を多くの方が取り上げました。残念ながら岩手県でもインターネットで患者を中傷したり、県外ナンバーの車を偏見の目で見たり、そういうことが起きてしまいました。

これらの問題を、例えば自らの障害になぞらえて差別をなくそう。そういう訴えがありました。あるいはハンセン病患者の苦難に例えたり、また人種差別の問題に発展させる方もおられました。

そしてそれとは別に、自分が SNS で誹謗中傷を受けた経験、また、いじめを受けて乗り越えた経験、そういった自らのつらい経験を基に、一人一人の個性を尊重して他者を思いやる気持ちを持つ。そういう訴えも聞かれました。

今ほど身近に差別があって、それが問われている時代はないのかもしれませんが。差別や偏見を完全になくする処方箋というものもないわけです。それでも自ら差別の原因を分析して自分なりの解決策を提言していく、それが「主張する」、すなわち「共感」を得るための作業であるわけです。

その他にも今日は命の大切さ、手話ボランティアの活動、リーダーシップの問題、地域の産業を活発にするにはどうすればいいか。そういった発表がありました。いずれも甲乙つけがたい内容で、実際に審査員の採点はほとんど差がついておりません。

最優秀賞に輝いた下橋中の鈴木凜さん、おめでとうございます。トップバッターとして発表した鈴木さんは幼い命の脳死、臓器移植という極めて重いテーマでありましたが、それを通じてかけがえのない命の大切さを訴えました。まさに聞く人の「共感」を得たと思います。鈴木さんは全国大会の候補者として北海道・東北ブロック大会に推薦されます。今日のような素晴らしい発表を期待しています。

皆さんがこれから社会人になって仕事をする時、いろいろな場で「わたしの主張」をしていかなければなりません。繰り返しになりますが、「主張する」ということは相手の共感を得る作業です。ぜひ、その作業を続けていただきたいと思います。そして「共感を得る」ということは、自分にとっての喜びでもあるわけですね。

今日の発表に至るまでさまざまな努力を重ねてこられたと思います。その一つ一つが皆さんのさらなる成長につながったのは間違いありません。それをこれからの学校生活、そして社会での生活に活かしていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

各地区大会の開催結果

(注) 出場者欄 最=最優秀賞 秀=優秀賞 良=優良賞

盛岡東地区 応募者数 419人

日 時 令和2年8月31日(月) 13:00~17:00

場 所 盛岡東警察署

審査委員

(株)岩手日報社報道部第二部長	熊谷 宏 彰
盛岡教育事務所在学青少年指導員	佐藤 嘉 彦
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	佐藤 精 晋
盛岡東警察署刑事官	西 舘 治
盛岡東地区防犯協会連合会長	鎌田まき子

出場者

1 踏み出す勇気	米 内 3年 岸 本 來 心
2 彩りを添えられる人に	下小路 3年 西 野 結 依
秀 3 生き続ける	下 橋 3年 鈴 木 凜
4 黄色いおじさんの因数分解	大 宮 3年 渡 辺 奏
5 新しい社会を生きるとは	岩大教育 学部附属 3年 福 田 莞 奈
6 自分らしく	飯 岡 3年 田 村 栞 菜
最 7 See you!	河 南 3年 松 本 響 佳
良 8 「小さな力」から広げていく	仙 北 3年 高 橋 優 華
良 9 動物の命	白百合 3年 藤 原 羽 夏
10 後世に伝えていきたいこと	玉 山 2年 松 森 美 月
11 自分らしく生きる	乙 部 3年 鎌 田 祐 共
12 私を変えるのは私	洪 民 3年 坂 本 は る な
良 13 「70億人の他人」と「自分」	黒石野 3年 佐 々 木 清 良
14 ひらく・ひろがる・つながる	松 園 3年 高 橋 菜 生
15 「差別」に立ち向かうためのアイテム	見 前 3年 工 藤 涼 哉
16 「書く」ことで伝える想い	見前南 3年 小 野 寺 寿 々 花
17 人間だから	巻 堀 3年 伊 藤 蓮 人
会長賞 18 「普通」とは何か	上 田 3年 佐 藤 瞳
秀 19 自分が自分らしくある社会へ	北松園 3年 細 越 瀬 奈

盛岡西地区 応募者数 419人

日 時 令和2年8月31日(月) 13:30~16:00

場 所 盛岡市立厨川中学校

審査委員

(株)岩手日報社編集局整理部第二部長	本 波 勉
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	岩 崎 雅 司
滝沢市教育委員会社会教育指導員	小 山 孝 浩
雫石町教育委員会社会教育指導員	下 川 恵 司
盛岡西警察署長	金田一正人
盛岡西地区少年警察ボランティア協会会長	切 金 一 夫
盛岡西地区防犯協会連合会長	佐 藤 栄 一

出場者

1 情報と共に生きるために	土 淵 3年 山 根 れ い か
最 2 「自分」を変える小さな一歩を	北 陵 3年 内 舘 凜

3 未来の日本のために	城 西 3年 佐 藤 恭 介
4 逆境の中で	姥屋敷 3年 太 田 結 寿 花
5 人生の分岐点	滝沢第二 3年 平 田 絆 那
良 6 スマホ依存	滝 沢 3年 菊 池 結 衣
7 私の声	柳 沢 3年 小 澤 珠 子
8 私を支えてくれたもの	一本木 3年 深 澤 亮 太
9 ルールより先にマナーを守ろう	中央附属 3年 釜 ヶ 澤 堯
良 10 人とのつながり	厨 川 3年 佐 々 木 遥 名
秀 11 伝えるということ	雫 石 3年 松 原 ひ よ り
秀 12 違いを理解する	滝沢南 3年 熊 谷 心 琴
良 13 チャレンジするということ	厨 川 2年 岡 田 莉 央

北岩手地区 応募者数 328人

日 時 令和2年9月3日(木) 13:30~16:00

場 所 八幡平市立安代中学校

審査委員

八幡平市教育委員会教育長	星 俊 也
葛巻町教育委員会教育長	高 畑 嗣 人
岩手町教育委員会教育長	佐 藤 卓
岩手警察署長	藤 林 隆 博
岩手警察署生活安全課長	川 原 郁 子
北岩手地区少年警察ボランティア協会会長	松 村 昭 一
(株)岩手日報社八幡平支局長	及 川 慶 修

出場者

良 1 たくさんの笑顔を届けたい	西 根 3年 松 村 楓 蓮
2 「見方」と心 広がる世界	西根第一 3年 津 志 田 富 仁
良 3 私の軸となる大切なパーツ	松 尾 3年 古 川 真 愛
秀 4 心を開いて	安 代 3年 齋 藤 愛 華
最 5 ボランティアってめんどくさい!?	沼宮内 3年 三 浦 巴 那
良 6 人のために	川 口 3年 瀧 本 珠 希
7 コロナ社会を生き抜く鍵	一方井 3年 高 村 穂 乃 香
8 夢のきっかけをくれた牛	葛 巻 3年 向 川 原 大 和
9 僕の夢	江 刈 3年 恵 津 森 大 貴
秀 10 人を隔てるもの	小屋瀬 3年 江 田 理 栞

紫波地区 応募者数 231人

日 時 令和2年9月2日(水) 13:45~16:30

場 所 紫波町中央公民館

審査委員

(株)岩手日報社報道部記者	山 本 直 樹
矢巾町教育委員会教育研究所長	高 橋 眞 司
紫波町教育委員会教育相談員	菅 野 秀 一
盛岡教育事務所在学青少年指導員	畠 山 雅 之

出場者

1	悔いなき人生を	矢 巾 2年 横沢千星良
2	地域の誇りを未来へ	紫波第二 3年 田村直也
良 3	求めるもの	矢 巾 3年 千葉よしの
4	今の私にできること	矢巾北 2年 川向杏奈
5	「支える言葉」～助け合える世界を普通に～	矢巾北 1年 晴山優樹
最 6	同じ人間なのに	紫波第一 3年 菅原彩希
秀 7	笑顔で共に生きる	紫波第二 3年 伊藤大翔
8	自らの足で	紫波第一 3年 松尾結
良 9	言葉一つに心を込めて	紫波第三 3年 北條和

花巻地区	応募者数	229人
------	------	------

日 時 令和2年9月3日（木）14：00～15：45

場 所 花巻市文化会館

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員	山 蔭 知 也
（株）岩手日報社花巻支局長	新 沼 雅 和
花巻警察署長	高 橋 明 弘
花巻市校長会笹間第一小学校長	高 橋 昌 克
花巻市教育委員会スクールソーシャルワーカー	高 橋 啓 悦
花巻市青少年育成市民会議会長	鎌 田 幸 也

出場者

1	南中だけのハーモニーを奏するために	南 城 3年 高橋空楽
良 2	I'm fine	湯 本 3年 伊藤彩綾
秀 3	モッタイナイ	花 巻 3年 瀬川真由
良 4	その人らしく	花巻北 3年 古舘春乃
最 5	音のない舞	矢 沢 3年 山口莉乃
良 6	転機～チャンス～	宮野目 3年 加藤ゆい
7	希望のひとかけら	西 南 3年 堀岡奏
8	人のために、自分のために	石鳥谷 3年 藤原詩
9	僕が変わる みんなが変わる	湯 口 3年 平賀正樹
10	私たちが未来を創る	大 迫 3年 小野愛姫
秀 11	言葉の力を信じて	東 和 3年 佐々木愛華

北上地区	応募者数	212人
------	------	------

日 時 令和2年8月27日（木）14：00～16：30

場 所 北上市立東陵中学校

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員	多 田 克 巳
（株）岩手日報社北上支局長	稲 垣 大 助
北上警察署長	千 田 敬 喜
和賀地区校長会二子小学校長	齋 藤 佳 孝
北上市社会教育委員会議長	奥 山 則 男

出場者

1	責任ある行動	上 野 3年 井上遥
2	今、私たちにできること	湯 田 3年 加賀遥菜
3	想いをつないだ糸	和賀東 3年 石川那緒

良 4	「誇り」をもって後悔のない生き方を	南 3年 佐藤鈴緒
5	本気で打ち込むということ	飯 豊 3年 平井心美
秀 6	平和への一歩	東 陵 3年 及川嵩浩
7	外の世界を知ること	沢 内 3年 藤原芽生
8	乗り越えた先を見たいから	江釣子 3年 佐々木陽彩
良 9	まると、心を受け止めて	北 上 3年 清水彩花
10	この音色をあなたに	和賀西 3年 高橋陽香
最 11	当たり前じゃない日常、当たり前の違い	北上北 3年 小田島はな
12	「仲間」で広がる世界	東 陵 3年 主濱楓介

奥州地区	応募者数	558人
------	------	------

日 時 令和2年8月27日（木）13：40～16：00

場 所 奥州市立衣川中学校

審査委員

（株）江日日新聞社編集局長	小野寺和人
県南教育事務所在学青少年指導員	久保田 淳
（株）岩手日報社奥州支局長	佐藤俊男
奥州地区少年警察ボランティア協会長	今 野 誠
奥州警察署長	菊 地 一 也

出場者

1	命の重さ	前 沢 3年 菊池侑稟
良 2	ボランティア 小さな一歩を踏み出そう	江刺南 3年 菅野ひとは
良 3	「守られる側」からの卒業	胆 沢 3年 千葉優輔
4	「言葉」と生きるために	東水沢 3年 佐々木泉綺
良 5	ボランティア 一理解する心 思いやる心	江刺第一 3年 今松紘也
秀 6	笑顔は世界共通語	水沢南 3年 千枝美貴
7	ゆっくりでいいですよ	水 沢 3年 千田理央奈
8	支え合う	衣 川 3年 千葉優歌
9	強さと優しさを持ち すべきこと	江刺東 3年 佐藤響葵
最 10	「恐れ」と向き合って	金ヶ崎 3年 鈴木香桜

一関地区	応募者数	322人
------	------	------

日 時 令和2年9月1日（火）13：30～16：00

場 所 一関市立厳美中学校

審査委員

（株）岩手日報社一関支社長	千 葉 恵
一関警察署長	板 垣 則 彦
県南教育事務所在学青少年指導員	加 藤 清
一関市教育委員会教育研究所教育相談員	浅 沼 卓
平泉町教育委員会教育委員	三 浦 英 子

出場者

1	日々の『感謝』	厳 美 3年 佐藤真之将
2	いつかドライバーになっている私へ	一関東 3年 小濱愛桜
良 3	逆転の発想の先に	平 泉 3年 高橋恭平
4	私にできること	磐 井 2年 志田心美
秀 5	「自分を受け入れる」ということ	一 関 3年 及川陽実
6	正解はいつも一つじゃない	萩 荘 3年 田中夢望

- | | | | |
|---|----|---------------|------------------|
| 良 | 7 | 地域と伝統をつなぐ糸 | 舞 川 3年 佐藤 玲 凪 |
| | 8 | 価値あるもの | 花 泉 3年 千葉亜柚奈 |
| 最 | 9 | 心のディスタンスは要らない | 一関一高附属 3年 佐藤 優 奈 |
| | 10 | 私が環境汚染へ思うこと | 桜 町 3年 菊 池 日 向 |

一関東地区 応募者数 73人

日 時 令和2年8月27日（木）13：30～15：15

場 所 一関市立藤沢中学校

審査委員

- | | |
|--------------------|---------|
| 県南教育事務所在学青少年指導員 | 加 藤 清 |
| 一関東地区防犯協会連合会長 | 三 浦 幹 夫 |
| 千厩警察署長 | 伊 藤 寛 |
| 一関市教育委員会教育研究所教育相談員 | 戸 田 良 一 |
| （株）岩手日報社一関支社長 | 千 葉 恵 |

出場者

- | | | |
|---|---------------------|----------------|
| 1 | 言葉を大切に | 東 山 3年 千 葉 萌 加 |
| 2 | 伝える力 受け止める力 | 大 原 3年 菅 原 瑞 姫 |
| 最 | 3 命輝く未来へ | 藤 沢 3年 佐藤 早 和子 |
| 4 | 赤いノート | 室 根 2年 小 山 美 桜 |
| 5 | 理解し合い、支え合って生きていくために | 大 東 3年 菅 原 舞 寛 |
| 秀 | 6 人に点数をつけると | 川 崎 3年 金 野 夏 凜 |
| 7 | 僕たち探検隊 | 千 厩 3年 北 田 壮 大 |
| 良 | 8 わたしの可能性 | 興 田 3年 及 川 小 春 |

気仙地区 応募者数 349人

日 時 令和2年9月3日（木）13：30～15：00

場 所 大船渡警察署

審査委員

- | | |
|-------------------|---------|
| 気仙地区防犯協会連合会副会長 | 近 藤 均 |
| 大船渡警察署長 | 吉 田 知 明 |
| 沿岸南部教育事務所在学青少年指導員 | 菅 野 稔 |
| （株）岩手日報社大船渡支局長 | 長 内 亮 介 |
| （株）東海新報社社長 | 鈴 木 英 里 |

出場者

- | | | |
|---|------------------|------------------------|
| 1 | 夢の実現に向かって | 大船渡 3年 三 条 優 介 |
| 2 | あたりまえの尊さ | 赤 崎 3年 前 関 龍 飛 |
| 良 | 3 私のボタン | 高田東 3年 佐々木乙羽 |
| 秀 | 4 「あたりまえ」という名の幸せ | 大 船 渡 第 一 3年 古 水 健 一 郎 |
| 5 | 勇気の向こうに | 高田第一 3年 阿 部 芹 菜 |
| 6 | 命を買うということ | 末 崎 3年 平 野 夢 子 |
| 7 | 「私」は「私」でいい | 世田米 3年 菊 池 真 衣 |
| 最 | 8 あなたの勇気から | 綾 里 3年 花 輪 日 菜 里 |
| 良 | 9 私を成長させてくれたもの | 有 住 3年 伊 藤 颯 柊 |

遠野地区 応募者数 22人

日 時 令和2年8月31日（月）13：30～15：30

場 所 みやもりホール

審査委員

- | | |
|-------------------|-----------|
| 中部教育事務所在学青少年指導員 | 山 蔭 知 也 |
| （株）岩手日報社遠野支局長 | 小 野 寺 隼 矢 |
| 遠野警察署長 | 亀 山 久 雄 |
| 遠野市校長会青笹小学校長 | 佐 々 木 美 紀 |
| 遠野市教育委員会事務局学校教育課長 | 佐 々 木 淳 一 |
| 遠野市少年委員協議会副会長 | 菊 池 タ キ |

出場者

- | | | |
|---|-------------------------------|------------------|
| 良 | 1 エスプレシーボな人生を目指して | 遠野東 3年 高 橋 太 陽 |
| 秀 | 2 人を幸せにするために | 遠 野 2年 鳥 屋 部 心 桜 |
| 良 | 3 言葉から始まる優しい社会 | 遠野東 2年 阿 部 愛 奈 |
| 良 | 4 曾祖母の生きがい | 遠 野 1年 阿 部 日 和 |
| 良 | 5 その先の自分へ | 遠 野 3年 阿 部 杏 海 |
| 秀 | 6 故郷のこれから | 遠野西 2年 菅 原 愛 華 |
| 最 | 7 新時代を強く生きていく
～これから始まる私の道～ | 遠野東 3年 菊 池 恭 護 |
| 良 | 8 わたし主張が… | 遠野西 3年 菊 池 稜 真 |

釜石地区 応募者数 105人

日 時 令和2年8月28日（金）13：30～14：30

場 所 大槌町城山公園体育館

審査委員

- | | |
|---------------|---------|
| 釜石市教育委員会教育長 | 高 橋 勝 |
| 大槌町教育委員会教育長 | 沼 田 義 孝 |
| 釜石警察署長 | 仲 谷 千 春 |
| （株）岩手日報社釜石支局長 | 川 端 章 子 |

出場者

- | | | |
|---|-------------|--------------------------|
| 1 | 自分らしく生きる | 甲 子 3年 佐 藤 亜 胡 |
| 最 | 2 つながろうとする心 | 唐 丹 3年 中 居 林 優 心 |
| 3 | 継続は力なり | 大 平 3年 久 保 琉 唯 |
| 秀 | 4 雨の日の出来事から | 釜 石 3年 西 山 彩 菜 |
| 良 | 5 私の生きる道 | 吉 里 吉 里 学 園 3年 越 田 久 美 子 |
| 6 | 最後までやり遂げる | 釜石東 3年 栗 澤 花 笑 |
| 7 | 「どう」とらえるか | 大槌学園 9年 藤 原 橙 矢 |

宮古地区 応募者数 141人

日 時 令和2年9月8日（火）13：30～16：00

場 所 宮古警察署

審査委員

- | | |
|-----------------|-----------|
| 山田町教育委員会教育長 | 佐 々 木 茂 人 |
| 宮古教育事務所在学青少年指導員 | 佐 藤 和 信 |
| 宮古市教育委員会教育研究所長 | 市 村 章 |
| 宮古警察署長 | 金 崎 将 樹 |
| （株）岩手日報社宮古支局長 | 刈 谷 洋 文 |

出場者

- | | | |
|---|--------------------|----------------|
| 1 | SNSとどう向き合うか | 新 里 3年 巖 里 桜 |
| 良 | 2 出会いがつなぐ未来 | 第 二 3年 前 川 乙 姫 |
| 3 | 「当たり前」が当たり前に見えるように | 宮古西 3年 小 笠 原 舞 |

4	画面に写る私たち	田老第一	3年	津田 彩花
5	さんさと生きる	花 輪	3年	佐々木彩音
秀 6	「普通」って何だろう	第 一	3年	橋 場 馨
良 7	キセキの輝跡～仲間と共に～	山 田	3年	小林 鈴 菜
8	応援される人	崎 山	3年	高橋 琉 愛
最 9	言葉の力	河 南	3年	小本 真 耶
秀 10	命を繋ぐ	川 井	3年	菊地 梨 緒
11	未来を守るために	津軽石	3年	黒坂真璃菜
良 12	女神の前髪をつかむ	重 茂	3年	後川 芽 久

下閉伊北地区	応募者数	122人
--------	------	------

日 時 令和2年9月1日（火）13：00～15：30

場 所 岩泉町民会館大ホール

審査委員

県立岩泉高等学校長	吉 川 彰 彦
（株）岩手日報社宮古支局長	刈 谷 洋 文
岩泉町教育委員会教育長	三 上 潤
田野畑村教育委員会教育長	相 模 貞 一
岩泉警察署長	吉 田 孝 夫

出場者

1	理解と優しさを持って	小 本	3年	片山 月 姫
2	私にできること	小 本	3年	竹花 永 愛
秀 3	ふるさとを愛し、守れる人に	釜津田	3年	佐藤 里 菜
良 4	月のようにになりたい	田野畑	3年	高橋 彩 華
最 5	地球に生きる	小 川	3年	遠藤 未 羽
6	LINE～現在のつながり～	小 川	2年	工藤 可 乃
7	共に生きる	岩 泉	3年	太田 茜
8	命を守るために	岩 泉	3年	應家 茜 音
9	前を向いて	田野畑	2年	三上 煌 陽

久慈地区	応募者数	13人
------	------	-----

日 時 令和2年9月7日（月）13：30～16：30

場 所 久慈市文化会館アンバーホール

審査委員

久慈市教育委員会教育長	後 忠 美
久慈警察署長	熊 谷 秀 一
久慈地区中学校文化連盟会長	小 橋 敏
（株）岩手日報社久慈支局長	及 川 純 一
久慈地区少年警察ボランティア協会会長	濱久保優司
県北教育事務所在学青少年指導員	新 毛 公 生

出場者

良 1	愛の証と向き合って	長 内	3年	中戸鎖寿奈
2	友達ってなに？	山 形	3年	金子 桃 華
3	言葉の力	夏 井	3年	田澤 優 衣
最 4	老いと向き合う	種 市	3年	田毛 咲 羽
5	コロナ禍の中で生きる	大川目	3年	宮澤 豊 希
6	言葉のパワー	侍 浜	3年	川戸 玲 奈

秀 7	私の小さな宝物	普 代	2年	片座 早 彩
8	心を汲む力	宇 部	3年	宇部 優 海
良 9	行動に移す勇氣	中 野	3年	高屋敷楓花
10	海を守るために	三 崎	3年	新井田飛侖
秀 11	手と手を取り合えば	大 野	3年	一本松愛莉
良 12	自分をつくっている言葉	久 慈	3年	秋 元 華
13	幸せの環	野 田	3年	佐々木茉奈

二戸地区	応募者数	104人
------	------	------

日 時 令和2年9月4日（金）13：30～15：30

場 所 九戸村立九戸中学校

審査委員

県北教育事務所在学青少年指導員	新 毛 公 生
九戸村教育委員会教育長	岩 渕 信 義
二戸地区中学校文化連盟会長	工 藤 久 尚
二戸警察署長	南 部 一 成
二戸地区少年警察ボランティア協会会長	田 畑 文 弥
（株）岩手日報社二戸支局長	阿部友衣子

出場者

1	目の前のことを全力で	福 岡	3年	小保内康佑
2	家族の絆	金田一	3年	大平 隼 人
最 3	故郷	浄法寺	3年	安ヶ平海永
4	未来につながる今	軽 米	3年	上村 麗
5	「生きづらさ」と向き合って	九 戸	3年	岩渕 愛 海
秀 6	私の「選択」	九 戸	3年	泉田 果 那
良 7	完璧の追求	一 戸	3年	稲塚 康 太
良 8	ハートをつなげて	奥中山	3年	中島 莉 乃

令和2年度（第22回）「わたしの主張岩手県大会」 審査要領

1 審査基準

(1) 採点の基準

各審査委員の持ち点は、発表者1人につき、次の区分による100点とし、採点は減点法とする。

ア 論 旨	55 点	} 計 100 点
イ 表 現	30 点	
ウ 態 度	15 点	

エ 時 間 主張時間は5分とする。

※ 主張時間が4分30秒未満の場合、又は5分30秒を超える場合は、それぞれの時間から10秒を過不足するごとに1点を減点する。

※ 発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む）から読み終わり（パフォーマンス含む）までとする。

(2) 採点の内容

ア 論 旨：① 若者（中学生）らしい感性で、新鮮な主張であるか。

② 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。

③ 自己の目標を实践する意欲や、提言に関する熱意・真剣さが感じられるか。

④ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

イ 表 現：① 熱意と説得力があり、聴衆に感銘を与えたか。

② 言葉や発声は明瞭で、抑揚・間の取り方も適切であったか。

ウ 態 度：（聴衆をよく見て）落ち着いた態度であったか。

エ 時 間：・主張開始後5分 …………… ベルを1回

・主張開始後5分30秒 …………… ベルを2回

2 審査方法

(1) 審査表の記入

各審査委員は、各発表者の審査結果を、審査採点票（個票）及び審査採点票（控）に記入する。

(2) 順位の決定

各発表者の主張終了後、審査会において最優秀賞1人、優秀賞2人、優良賞3人を選考する。

受賞者の決定は、採点集計表を参考とし、審査委員の協議によるものとする。

なお、最優秀賞受賞者は、「少年の主張全国大会」候補者として、北海道・東北ブロック審査会に推薦するものとする。

3 成績発表並びに講評

審査委員長が結果を発表し、講評を行う。

※各地区大会の審査要領は、岩手県大会審査要領に準じるものとする。

令和2年度（第22回）「わたしの主張岩手県大会」実施要綱

1 目 的

次代を担う中学生が、未来に向けての夢、社会に対しての意見や希望、または日常生活の中で感じたこと（意見・発見・提案・疑問）など、自分の気持ちを素直に表現する弁論の場を提供することにより、地域社会との関わり（つながり）について考え、行動する契機にするとともに、参加中学生の文化的な資質向上に寄与し、大人を含めた多くの人が、中学生に対する認識、理解を深めることにより、少年の健全育成の充実を期そうとするもの。

2 対 象

県下に在住している中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にある方

3 主 催

わたしの主張岩手県大会実行委員会

【 岩手県 岩手県教育委員会 岩手県警察本部 （公社）岩手県青少年育成県民会議
（公社）岩手県防犯協会連合会 （株）岩手日報社 岩手県中学校文化連盟 】

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

4 共 催

滝沢市 滝沢市教育委員会

5 後 援

岩手県中学校長会 岩手県PTA連合会 NHK盛岡放送局 IBC岩手放送 テレビ岩手
エフエム岩手 めんこいテレビ 岩手朝日テレビ

6 開催日時

令和2年9月16日（水） 12時45分～16時30分

7 開催場所

ビッグルーフ滝沢 〒020-0665 滝沢市下鶴飼1番地15

8 開催方法

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一般の観客は入場しない無聴衆での開催とします。今後の状況次第では、会場へ参集せず、作文・音声での審査会とする場合もあります。（「別記」参照）

9 出場者

別に定める推薦要領に基づき、地区大会より推薦された17名による主張発表を行います。

10 発表内容

(1) 主張の内容

下記の内容を参考として、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを率直に表現してください。未発表・自作のものに限ります。

分類	内 容	これまでの例(参考)
A	- 社会や世界に向けての意見 - 未来への希望や提案など	- 環境問題、国際社会について - 地域の伝統文化・伝統芸能 - 貧しい国への支援 - 介護の問題 - 夢に向かって 等
B	- 家庭、学校生活、社会（地域社会）との関わり - 身の回りや友達との関わりなど	- 命の尊さ - 共に生きる(障がいと向き合う) - 家族愛 - 人との関わり - 復興への思い 等
C	- 安全で安心な生活ができる地域社会づくり - テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動 - 大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など	- 犯罪のない明るい地域社会づくり - 交通事故を防止するには - いじめのない社会生活 - 公共のマナーや規則を守ること - インターネットやスマートフォンの危険、正しい利用方法 - 報道されている事件や事故の防止 等

※ 複数の分類に関わることも十分想定されます。

※ 商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。

（悪い例：〇〇県にある〇〇旅館 良い例：〇〇県にある旅館 など。）

(2) 発表方法

自由（日本語で発表することが条件）

※ 発表の際はマイクを使用します。

※ 発表に際しては、パフォーマンス（例えば、服装は自由とし、小道具を使用してもよい）を取り入れてもよいこととします。ただし、発表者以外の動作・補助等は認めません。

※ 発表者の礼は、発表前後の2回とします。（礼は審査対象とはなりません）

(3) 発表時間

5分間（400字詰め原稿用紙4枚程度）

※ 発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む）から読み終わり（パフォーマンス含む）までとします。

※ 発表時間が4分30秒未満の場合、又は5分30秒を超える場合は、採点の際に1点減点となりますので、ご注意ください。（さらに10秒ずつ過不足するごとに1点ずつ減点）

【発表時間による減点】

時間	4' 10～4' 19	4' 20～4' 29	4' 30～5' 30	5' 31～5' 40	5' 41～5' 50
減点	2	1	0	1	2

11 表彰

発表終了後、直ちに開催する審査会において、最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞3名を選考し、表彰します。

なお、最優秀賞受賞者は、北海道・東北ブロック審査会に「少年の主張全国大会」の候補者として推薦します。

12 自然災害等への対応

(1) 自然災害等による大会中止

大会中止の判断基準は、以下のとおりとします。

① 自然災害等により、欠席者が3分の1を超える見込みの場合（7名以上が参加できない場合）

② 会場及び会場周辺の被災等により、当日の大会開催が困難な場合

(2) 大会中止時の対応について

① 当日8:30分前に中止と判断した場合は、直ちに参加者等へ連絡します。

※ 当日8:30以降は、原則として参加可能者のみで大会を実施し、最優秀賞受賞者を東北・北海道ブロック大会へ推薦します。

※ 当日8:30以降であっても、11(1)②と判断される場合には、大会を中止し、直ちに参加者等へ連絡します。

② 大会中止の場合も、11(1)②の場合を除き、会場に集合可能な審査員に集合していただき、作文審査により最優秀賞を決定します。

(3) 新型コロナウイルス感染拡大に伴うリスクへの対応

感染拡大や学校行事等の状況を考慮しながら、開催の有無や開催の方法等について実行委員会で随時協議し、各地区実行委員会に連絡することとします。（「別記」参照）

13 その他

(1) 応募原稿は返却しません。また、岩手県大会に参加した作品の出版権・放映権は、大会主催者に帰属します。

(2) 岩手県大会出場者及び引率者（1名）の旅費は主催者が負担します。県大会出場者には、出場決定後改めて案内を送付します。

14 問合せ先

【主に実施要綱や地区大会の結果取りまとめ等に関する事】

わたしの主張岩手県大会実行委員会事務局		
〒020-8570	盛岡市内丸10-1	TEL 019-629-5336
	岩手県環境生活部若者女性協働推進室内	FAX 019-629-5354

【主に県大会出場者や県大会の運営に関する事】

公益社団法人 岩手県青少年育成県民会議		
〒020-0045	盛岡市盛岡駅西通1丁目7-1 アイーナ6階	TEL 019-681-9077
		FAX 019-681-9078

【主に地区大会の運営・予算に関する事】

公益社団法人 岩手県防犯協会連合会		
〒020-0881	盛岡市天神町11-1	TEL 019-653-4448
	岩手県交通安全会館	FAX 019-653-4488

わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者

回	年度	開催 期 日	会 場	最 優 秀 賞 受 賞 者				
				学 校 名	学年	氏 名	発 表 題	備 考
1	11	11.9.24	盛岡市立 飯岡中学校	一関市立 厳美中学校	3 年	佐藤 遥	苦悩の日々を乗り越えて	
2	12	12.9.21	矢巾町 「田園ホール」	花巻市立 南城中学校	2 年	小野寺 静	日本と中国のかけ橋に	
3	13	13.9.19	玉山村 「姫神ホール」	釜石市立 甲子中学校	3 年	八幡 茜	海外語学学習で学んだ心	全国大会出場、 「青少年育成国民会議会長奨励賞」受賞
4	14	14.9.19	雫石町 「野菊ホール」	久慈市立 久慈中学校	3 年	高安 愛美	風に吹かれて	全国大会出場、 「青少年育成国民会議会長奨励賞」受賞
5	15	15.9.19	岩手県立大学講堂	東山町立 東山中学校	3 年	高橋 志帆	老いも誇り	
6	16	16.9.27	花巻市文化会館	北上市立 南中学校	3 年	菅原 周平	嘶の言葉と言葉の話	全国大会出場、 「文部科学大臣奨励賞」受賞
7	17	17.10.4	盛岡市 「都南文化会館」	盛岡市立 上田中学校	3 年	坂本 潤奈	私は地球人	全国大会出場、 「文部科学大臣奨励賞」受賞
8	18	18.9.20	盛岡市 「アイーナホール」	遠野市立 上郷中学校	2 年	奥寺 大輔	とらわれない心で	
9	19	19.9.26	滝沢村 「チャグチャグホール」	普代村立 普代中学校	3 年	内野沢さつき	おじいちゃんからの伝言	
10	20	20.9.24	紫波町立 紫波第二中学校	八幡平市立 松尾中学校	3 年	藤原 寛	「吃音」の壁を越えて	全国大会出場、 「青少年育成国民会議会長奨励賞」受賞
11	21	21.9.24	盛岡市 「盛岡劇場」	盛岡市立 上田中学校	3 年	西郷 華菜	伝えていく責任	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
12	22	22.9.24	花巻市立 石鳥谷中学校	盛岡市立 見前中学校	3 年	因幡百合絵	どうせ枯れる花ならば	
13	23	23.9.22	滝沢村立 滝沢南中学校	陸前高田市立 気仙中学校	3 年	小笠原和恵	高らかに 響け	全国大会出場、 「審査委員会委員長賞」受賞
14	24	24.9.20	盛岡市 「盛岡劇場」	遠野市立 小友中学校	2 年	菊池愛利子	「命」をいただく仕事	
15	25	25.9.19	矢巾町 「田園ホール」	山田町立 山田中学校	3 年	中村 奈緒	「当たり前」の中に生きる	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
16	26	26.9.18	雫石町 「野菊ホール」	岩手大学教育学部 附属中学校	3 年	渡邊 美卯	一言の重さ	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
17	27	27.9.11	盛岡市 「キャラホール・都南公民館」	西和賀町立 沢内中学校	3 年	佐々木瑠海	支えられている命だから	
18	28	28.9.15	盛岡市 「小田島組☆ほ～る」	北上市立 南中学校	3 年	石川 杏奈	強く 優しく 未来を見つめて	
19	29	29.9.14	滝沢市 「ビッグルーフ滝沢」	奥州市立 東水沢中学校	3 年	小野寺悠来	得意なことを数えよう	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
20	30	30.9.14	矢巾町 「田園ホール」	岩手県立一関第一高等学校 附属中学校	3 年	小野寺千里	挑戦し続ける勇気	全国大会出場、 「国立青少年教育振興機構奨励賞」受賞
21	R1	R1.9.18	盛岡市 「小田島組☆ほ～る」	宮古市立 第一中学校	3 年	小笠原 凜	自由にはばたける社会へ	

(参考)

「第 42 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2020～」 入賞作品

【内閣総理大臣賞】

鹿児島県代表

池島 音羽（いけじま おとわ）さん 霧島市立横川中学校 3 年

発表テーマ：言葉を紡ぐ

【文部科学大臣賞】

栃木県代表

荒井 千恵理（あらい ちえり）さん 大田原市立金田北中学校 3 年

発表テーマ：静から動へ

【国立青少年教育振興機構理事長賞】

愛知県代表

戸塚 優羽（とつか ゆう）さん 豊田市立末野原中学校 3 年

発表テーマ：目には見えないもの

【審査委員会委員長賞】

静岡県代表 村松 グルン 良智美さん 浜松市立北浜中学校 3 年

発表テーマ：人生のかけがえのない財産について

島根県代表 武田 はぐみさん 松江市立宍道中学校 3 年

発表テーマ：「らしさ」を輝かせる

熊本県代表 大田 直人さん 熊本市立出水南中学校 3 年

発表テーマ：你好ニッポン

- 1 「第 42 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2020～」(WEB 開催) について
 - (1) 主 催：独立行政法人国立青少年教育振興機構（後援 内閣府、文部科学省ほか）
 - (2) 開催期間：令和 2 年 10 月 29 日（木）～11 月 30 日（月）
※審査結果は 11 月 8 日（日）に掲載されました。
 - (3) 開催場所：少年の主張全国大会 WEB ページ
（方法） 全国大会出場者（12 名）の主張発表動画を掲載
11 月 8 日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載
※全国大会に選出されなかった作品については作文が掲載されました。
 - (4) 参 加 者：各都道府県より推薦された優秀者 1 名及び主催者より推薦された優秀者の中から代表として選ばれた 12 名
※ 岩手県大会最優秀賞受賞者の盛岡市立下橋中学校 3 年 鈴木凜さんが努力賞を受賞しました。
- 2 入賞作品を印刷物等に転載する場合は、国立青少年教育振興機構（教育事業部事業課事業係 TEL03-6407-7683）から許可を受けてください。

言葉を紡ぐ

鹿児島県 霧島市立横川中学校 3年 池島 音羽

「音羽ってさ、最近調子乗ってるよね。偉そうにさ。まじ、ウザい。」

それは、突然のことだった。冬が、静かに足音を忍ばせながら近づいてきたあの日。放課後の教室に冷たい風が吹き抜けた。息ができなかった。ただ、茫然と立ち尽くすしか。心の奥を鋭い刃物でえぐられる。無理に笑おうとすると、頬が引きつった。私、今、どんな顔してるんだろう。真っ白な世界にただ一人取り残された。頭の中に浮かぶのは、疑問だらけ。ついさっきまで、仲良く話してたよね。どうして。どうして私が。私、そんなに調子に乗ってたかな・・何か、悪いことしたかな。

その日からすべてが変わった。ひそひそ話をする友人の姿を見ては、その場から逃げ出した。怖かったから。きっと自分のことをいってるんだろうって思った。そそくさと教室を出る私の背中に浴びせられた言葉。

「ほんと何なのけ。ウザいんだけど。」

誰かに相談したくてもできなかった。相談したら、また何かいわれるんじゃないかとおびえる日々。ベッドに横たわって意味もなく、天井を眺めた。頭の中の何かがプツツと切れた。気づいたら側に母がいて、私はすべてを打ち明けた。瞬きもせずに私の話を聞く大きな瞳に泣きじゃくる私の姿が映っていた。

「今まで辛かったね。あんたはすぐに一人で抱え込む癖があるから、誰にも相談できなかったんでしょ。今、お母さんに言った気持ちをほんの少しでもいいから相手の子に伝えてごらん。何も変わらなかったら、また、お母さんのところに戻ってきなさい。」

夕飯に出されたお味噌汁を一口すすると、心の中に溜まっていた何かが一瞬と抜けていった。久しぶりに感じたこの暖かさ。でも、どうやって伝えたらいいの。直接、言える勇氣なんて私にはない。だったら、どんな形であれ、自分の気持ちを伝えなきゃ。だって、私には帰って来られる場所があるんだから。

その夜、私はスマホを握りしめた。LINEを開き、ずいぶんと更新されていない画面を見つめ、自分の思いをしたためた。何度も何度も文字を打ち直した。私が悪いのなら何がいけなかったのかを教えてほしいということ。陰で言われるのはとても辛いということ・・送信ボタンを押す手が震え、どれだけの時間が経っただろう。これがきっかけで何かが変わるというのだろうか。

翌朝、既読のサインは付いたが、返信はなかった。学校についてもいつもと変わらない景色がそこにあった。「ごめん。」背中越しに聞こえた言葉。それは突然だった。伝わったんだ。少しずつ、私の世界に色が戻ってきた。「何か、気に入らないことがあったら、教えてね。」

途切れ途切れの私の言葉。

スティーブ・ジョブズ氏は「想いを形にして、想いを言葉にして、想いを伝達する。いくら素晴らしいものを作っても伝えなければならないのと同じ。」と語る。SNSは諸刃の剣。時に人を傷つけるが、人を救うことだってある。世の中は情報化社会だ。これから先も、私たちは情報の渦の中で生き抜くことになる。何を学び、どんな力を身につけなければならないか。今、文科省が勧める「GIGAスクール構想。」この目的は、一人一台のコンピューターと、一人一人の個性に合わせた学習の実現だと言われている。多くの情報を活用する力が私たちに求められているのだ。だが、その基盤にあるものは何だろう。どれだけ、情報化の波が押しよせようとも、人間が人間としてあるためには、想いを言葉に紡ぎ、相手に伝えることではないか。そして、人と人とがつながることで、新しい時代を築けるのではないか。帰宅した私を母が笑顔で迎えた。

「何か食べたいものある。」

私は迷わず答えた。

「お味噌汁。飲みたい。」

静から動へ

栃木県 大田原市立金田北中学校 3年 荒井 千恵理

緩急のあるなめらかな運筆。白い紙の上に伸び伸びと広がっていく墨の色。

「私もやってみたい！」

私が書道と出会ったのは、3歳の時でした。その日から11年、私は祖母の教場で一生徒として書を学んできました。百枚以上書いても納得いかず、先生である祖母と意見が合わず、泣きながら次の紙を下敷きにのせたこと。数えきれない失敗と挫折を繰り返して、一つの作品が仕上がったときの達成感。それらの経験は今、私の自信であり、誇りでもあります。

中学生になって、新しいことにチャレンジしようと思った私は、剣道部に入りました。剣道には、長年続けてきた書道と通じるものがあると感じたからです。剣道場の張り詰めた空気。面の中で反響する自分の呼吸と、心臓の鼓動の音。そして、静から動への瞬間的な移動。迷いや恐れを断ち切り、今と決めて踏み出す一步は、半紙に筆の穂先を落とす瞬間に似ています。どちらも強く、しなやかな心が大切です。そして、剣道との出会いによっても、私はまた一つ成長することができたと思っています。

それまでの私は、自分が思う正解にこだわり、自分が思う美しさや理想から外れたものを受け入れられないところがありました。それは自分が信じ、身につけたやり方こそが真に正しいものであってほしいという願いでもありました。しかし、剣道で、他の流派の先生から教えを受け、様々な個性を持つ選手と大会などで交流するうちに、それぞれの正しさや美しさがあるのだと思うようになったのです。そして、かたくなだった私の心は徐々に変化していきました。

思い返せば書道でも、あきらかに自分とは異なる筆づかひの作品が高い評価を受けていることに、納得がいけないと感じることがありました。自分の今までのやり方が絶対的なものであるという思い込みを捨てること。そういうしなやかさを手に入れることで、私の書道と剣道は、さらに豊かになっていくのだと気がついたのです。

中学校最後の大会に向けて、いよいよ本腰を入れようとしていたときです。全国的な新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、学校は休校になり

ました。部活動の大会は、春季・総体ともに中止。体育祭も中止となり、修学旅行は日帰りとなりました。休校中は家から出ることすら気が引けて、当たり前と思っていたことが次々と崩れていく日々を、現実感を持てないままに過ごしていました。

6月になって自粛が解除され、もとの生活が帰ってきたかのように思われたのは束の間で、私たちは今、感染症の第二波のさなかにいます。でも、休校や休業にするのではなく、三密を避けながらの暮らしを送っています。経済が破綻しないように、全面自粛ではなく、それぞれの判断で行動する。言うのは簡単ですが、非常に難しいことです。

私は、今のこの時を、静と動の「静」の時間として過ごすべきだと考えます。それは、ただ静かに禍をやり過ごす時間ではありません。書道でも剣道でも、「静」の時間に、己を見つめます。そして相手を見つめます。そこから、自分にできる最善の手を考え、動き出す準備をするのです。今この状況で、急いでもとの暮らしに戻すことを目標にするのが最善とは思えません。誰も経験したことがない出来事が起きているのですから、国や政治家の提案がうまくいかないことをただ責めるのではなく、失敗や間違いから学んでいかなければなりません。誰かがどうにかしてくれるのを静かに待つだけでなく、持続可能な新しい暮らし方を、私たちも考えなくてはならないのです。学校での過ごし方、家に帰ってからの習慣、それを考え、選び、実際に行動するのは私たち自身だからです。

私は将来、書道の指導者になりたいと考えています。生徒の背中から手に手を添えて、運筆を教えるようなやり方は、これからはもうできないのかもしれない。でも伝えたいことは変わりありません。どこまでも広く自由で、だからこそ厳しく美しい書の道を、どう伝えていくか。やり方は一つではないのです。自分にできることを、自分らしく、考えて実践していきます。

目には見えないもの

愛知県 豊田市立末野原中学校 3年 戸塚 優羽

「吃音症」というものを、どれくらいの人を知っているでしょうか。

吃音症とは、言葉がつまったり、なめらかに話せなかったりする発達障害です。わたしは、その吃音症。私が、その言葉を知ったのは小学校6年生のときでした。

6年生の学芸会、人前に出ることが好きな私は、やりたいと思っていた台詞の多い役になりました。頭の中で何度も台詞を繰り返し、イメージもばっちり練習を迎えました。しかし、ある特定の言葉を発しようとする、なぜかつっかえてしまい、うまく話せないことに気づきました。「あなた」「永遠」といった言葉の始めにア行がくる言葉が発音しづらいのです。頭では「言え！」と言う信号を出していても、言葉がのどを通らない。つかえる度に、周りからは白い目で見られる。「言え！」と必死になればなるほど、言葉が出なくなる悪循環。そんな私に、クラスの男子は「記憶喪失」とからかってきました。違うのに。台詞はちゃんと覚えているのに。あなた達よりずっと練習してるのに！そう言いたくても、「あなた」の「あ」の字が邪魔して上手く言えない。悔しさ、情けなさ、そして、学芸会を台無しにしてしまうのではないかという不安でいっぱいになり、家で泣いていました。

そんな私を見て、母が子ども発達センターに連れて行ってくれました。そこで診断された名前が吃音症。聞き慣れない言葉に、より不安が大きくなりました。言語聴覚士の先生が、「吃音も個性」。そう言いました。でもその言葉はそのときの私にはあまり響きませんでした。そんな私の悩みを、先生は根気よく聞いてくれました。少しずつではありますが、吃音に対する不安、辛さが消えてきました。「なんだ、私。このままでいいんだ。」と思えました。吃音の不安を取り除く説明をしてくれたことはもちろんですが、なにより、私の悩みを根気よく聞いてくれる。そんなことで、こん

なに心は軽くなる。この体験で、誰かが悩みを聞いてくれることの大切さを知りました。

学芸会本番、相変わらず私のア行はうまく発音できませんでした。感動的な見せ場のシーンでも、何度もつっかえてしまいました。悔しかった。だけど終わった後に、周りの人から「つまっている、一生懸命に言っている姿が良かった。」と言ってもらえました。このとき、初めて先生が言った「吃音も個性」の意味がわかった気がしました。

今でも私の吃音症は相変わらずです。ア行の発音は苦手だし、ふとした言葉でもつまってしまう。国語で音読が当たると少し緊張します。しかし、そんな私は今、生徒会長という立場になりました。生徒会長あいさつなどの人前で話す機会も増えました。でも、不思議と不安はありません。いつでも相談できる人が、私の周りにはたくさんいます。何より、「吃音症で上手く話せない生徒会長でもいいじゃない。吃音は個性なんだから。」と、背中を押す私がいます。

吃音症に限らず、人が抱えている悩みは目に見えないのかもしれない。もしかしたら、笑っている様に見えた誰かの心は、辛く、不安でいっぱいなのかもしれません。どんな小さいことでも良い。友達の様子がいつもと違ったら「大丈夫？」と声をかける。そんな些細なことが、相手にしたら大きな支えになるのかもしれない。

悩みは目には見えない。そして、それを支える手も、もしかしたら目には見えないものなのかもしれない。だけど、目には見えなくとも、悩みも支えも、そこにはある。目には見えないものだからこそ、それに気がつける自分でありたい。今まで私を支えてくれた感謝を胸に、吃音症である自分を誇れるように。

第 22 回わたしの主張岩手県大会発表文集

令和 2 年 12 月発行

編集 公益社団法人岩手県青少年育成県民会議

〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通 1 丁目 7 - 1

いわて県民情報交流センター（アイーナ）6 階

電話：019-681-9077 FAX：019-681-9078

ホームページ：<http://www.ipayd.server-shared.com/>

※ 転載等の問い合わせは、上記へご連絡ください。

